

第18回「文芸思潮」エッセイ賞 発表

第18回
文芸思潮
エッセイ賞

二〇二三年度第18回「文芸思潮」エッセイ賞は、一七三篇という、昨年とほぼ同じ数の御応募をいただきました。厚く御礼申し上げます。今回はレベルが高い作品が集まり、優秀賞レベルの作品がめじろ押しで、たいへん充実したコンテストとなりました。十代後半から九十代までの広い年齢層と同時に、地域的にもアジア、ヨーロッパなど広い地域から寄せられ、それぞれの貴重な体験や、鋭い社会批評なども含まれ、豊かな内容となりました。

例年の通り、まず予選担当による第三次までの予選選考が行なわれ、選出された最終作品を対象に、水木亮、都築隆広、五十嵐勉三人の選考委員によって（三神弘選考委員は病欠）八月十三日山梨県甲府市において最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定いたしましたので、ここに発表させていただきます。今号には最優秀賞・優秀賞作品を発表させていただきます。以後奨励賞も誌上に掲載させていただきます。明年もまた同じ要領で募集いたします。どうぞ奮って皆様のエッセイを御応募ください。お待ちしております。

最優秀賞

「文芸思潮」エッセイ賞

「病同・秒同」

西川かつみ（京都府南丹市）

「故郷に私はいない」

坂本 崇（Italy Cuneo）

優秀賞

「Gちゃんの小指」

渡辺 勝（長野県上田市）

「北緯5度の島の原爆人形劇」

高田ひとみ（北海道札幌市）

「わたしが統一教会に通っていた頃」

山田まさ子（大阪府堺市）

「カダフィーの国のヌエジ」

竹中水前（東京都葛飾区）

「女ともだち——同志」

宮尾美明（愛知県愛西市）

「たたむ」

中村郁恵（北海道札幌市）

「闘病に感謝」

金子亜実（東京都中野区）

「春風を纏った服」

菱川町子（愛知県稲沢市）

「眼、あるいは光について」

川寄雄司（東京都荒川区）

「海風に吹かれながら」

春木美子（静岡県三島市）

奨励賞

「海を眺めていた」 室伏三鶴（静岡県御殿場市）

「絶望から希望へ」 小倉一純（神奈川県川崎市）

「母の通信教育」 田中 修（茨城県笠間市）

「ポンデギな夜」 今井清賀（大阪府和泉市）

「エミリーの慧眼」 阪田光孝（大阪府藤井寺市）

「上野公園のホームレス」 西島雅博（福島県いわき市）

「無尽燈」 宮西和代（京都府京都市）

「骨を拾う」 本澤 章（京都府京都市）

選評



いがらし つとむ

1949 山梨県生まれ
79「流謫の島」で群像
新人長編小説賞受賞
98「緑の手紙」で読売
新聞・NTT プリンテック
主催第1回インターネット
文芸新人賞最優秀賞受賞
2002「鉄の光」で健友館
文学賞受賞

ハイレベルの豊饒

五十嵐勉

第一八回の文芸思潮エッセイ賞は、応募数が昨年とほぼ同じで少なく、内容も数に比例して落ちていたのではないかと危惧されたが、蓋を開けてみると、杞憂に過ぎなかった。むしろ例年よりも優秀賞レベルに良い作品が集中し、どれを落とすか、どれに泣いてもらうか、苦心し悩む事態となった。通例、最終選考は5点法で採点される。5点は最優秀賞、4点台は優秀賞、3点台は奨励賞、2点台は佳作、1点台は入選、それ以下は選外となる。集計して選考委員

の合計の高い順から並べていくのだが、評価がバラバラになる作品も多く、必ずしもこの上からの順で決まるわけではない。しかしとにかく今回トップは西川かつみ氏の「病同・秒同」で合計点が13・2だった。これは三人の選考委員（今年は三神弘選考委員が病気のため欠席）の平均が4・4ということになる。また最優秀賞の候補は選考委員の誰かが5点をつけた作品も有力になる。この方法で上から選考していくのだが、平均4点以上、つまり合計12点は、普通に考えれば優秀賞となり、いつもなら、11点以上も十分優秀賞の圏内にあるのだが、今回12点以上は一一作、11点以上は、さらに一二作あった。つまり優秀賞の圏内にある作品は計二三作あり、極めて高いレベルに作品が集まっていたことになる。ちなみに奨励賞の合計は9点以上が有力候補であり、その9点以上を獲得した作品は、なんと三五作あった。合わせると、五七作品が9点以上、奨励賞以上のレベルに達していたことになる。これは驚くべき数字であり、応募数が一七三に対して33%が奨励賞レベル以上というハイレベルであることを示している。選考委員にとつては嬉しい悲鳴であるが、どうしても簡い落とさなければならぬ事情があり、例年なら受賞していたレベルの作品が今年は涙を飲んでもらう結果となった。

エッセイ賞の選考では、まずトップ——最優秀賞作品から決める。ずばり当選はどれかだが、私はあまりに多い優

「小さな握りこぶし」はるひ（福岡県福岡市）
「ヒトリ生きるカナシ」森崎律子（大阪府大阪市）
「トンネルの向こう」ふとうちえこ（徳島県徳島市）
「元新卒の逃走」丹波蔵堂（埼玉県川口市）
「似非川柳も二〇〇〇柳」佐高源（山梨県中巨摩郡）
「母と娘と、そして私」武中彩（福岡県北九州市）
「二足の草鞋を履く二刀流——医学編——」

林 眞弘（石川県金沢市）
「孤高——亡き師を偲ぶ——」村松佐保（群馬県吾妻郡）
「私の好きな深蒸し茶をどうぞ」山野冬花（福岡県久留米市）
「ジャンケンで」熊谷和代（徳島県徳島市）
「父の行方」高澤弘至（長野県飯山市）
「今、このときをありがとう」紫陽花（東京都足立区）
「薫ちゃんに捧ぐ」植田郁子（京都府京都市）
「私のものがたり」相澤真理子（神奈川県横浜市）
「机の中の弁当」青地久恵（北海道釧路市）
「暗然たる世界に差し込む一筋の光」

木下ゆかり（東京都世田谷区）



1700 円

御注文はアジア文化社まで



1000 円

御注文はアジア文化社まで

秀作品の中から特にインパクトの強かった作品を三つ挙げた。これまでに三作受賞はなかったが、「病同・秒同」と、「故郷に私はいない」と、「Gちゃんの小指」の三作を最優秀賞にしてもいいのではないかと提案した。しかし他の選考委員に受け入れられず、結局二作に落ち着いた。

「病同・秒同」は末期癌の療養生活を過ごす筆者のそばにいる猫や、出入りする農作業者の励ましを得たりする日常を書いているが、励ましてくれた農作業者のほうが痛になり、先に逝く。残されたその言葉が、鮮やかな光を残していく。「苦しい時も、学問はできるかぎりすること。習気（しき）といって、身についた知識はこの世だけでなく、来世でも自分を助けてくれるから」それに対して筆者は「日々、死ぬことの恐怖を抑えきれないでいた私に、自分の心身の声を毎日丁寧聞き、そして人は遅かれ早かれ死ぬのだから死ぬということに甘えてはいけないことを、教えてくださった」と記す。こうした死と生の境界を斬新にめくり上げて踏み込み、新たな見方を呈示するその言葉には、日常を逆から見る強烈な光がある。さらに鮮烈なのは、その新しい見方による造語である。「病同」「僕の造語でね。病を得て少しは謙虚で深い人間になったような気がするよ。それにどんな状況でも人の根源的価値は変わらないと心から願う。身体を損なった分、見えないけれど心に蓄えられたものが増えたような気がする」「長生きだろうと、少々

優秀賞の渡辺勝氏「Gちゃんの小指」は、最近少しずつ減っている戦争中への回顧が一つの軸になっている。中国戦線での徴発に紛れて娘を強姦する戦争の現実の説得力があり、迫ってくるが、前半部と辻褄が合わない不整合があり、少し直してもらった必要があったのと、そこに示された冷酷さは戦争の真実であるには違いないが、平和に繋がるものとしての+アルファが欲しいのとで、惜しくも最優秀賞を逸した。しかし現在、忘れ去られつつある戦争の現実を少しでも振り返る契機となる意義は大きいので、この方向に、筆者の今後を期待したい。

高田ひとみ氏の「北緯5度の島の原爆人形劇」は、スリランカでの海外青年協力隊の活動を描いて躍動感がある。原爆人形劇を海外で行なうことの困難を乗り越えて、スリランカの人々との交流を深めつつ、意味ある活動が続けた一つの達成は、爽やかな読後感を残す。また「戦争と日本人がどう関わってきたかを考えるようになった」という、むしろ日本人の側の戦争への反省の希薄さに到達する部分は、鋭く突き抜けている。ただ、それを受けての全体の結論に、海外での「貴重な体験」を回顧するに留まっている真の問題提起の希薄さが覗いていて、主張の強さに欠けること、またタイトルについて「北緯5度」では曖昧で、どうして「スリランカ」とはっきり言わないのか不満だった。常連となった山田まさ子氏の「わたしが統一教会に通っ

早くこの世を去ろうと、今この瞬間を生きているというところに違いはないから、同じだね」「秒同だな。ははは」「こうした来世へと貫かれた言葉は新鮮である。この言葉によって命が新しいものへ開かれていく。その感覚が、痛になった人だけでなく、だれをも普遍的に救っていく点に大きな意義があると思った。

もう一つの最優秀賞の坂本崇氏「故郷に私はいない」は、まず文章がいい。おそらく文章は全応募者中最も緊密な凝集力を持っている。「鏡に写っていたのは知らない人間だった」という出だしもよく、説得力のある流れが快く進んでいく。父親が日本人で、母親がキプロス人という血筋を持つ筆者は、外貌によって安易に判断する心ない人々の言葉に苦悩する。日本人として育ち、日本語も母語としてきれいに話す日本人としての内質が、外貌によって傷つけられることに苦しむ。「私が日本に戻ってこないのは、おそらく外国でしか私は日本人になることができないからだと思う」という吐露には、痛切な響きがあり、ここに長く単一民族として国家を成し、閉鎖的であった日本の内向社会性への痛烈な批判がある。否応なく国際化の波に晒され、異人種と混じらざるを得ない現実の状況に対して、あまりに対応が遅れ、歪みや悲劇を生んでいる現代日本の一面への、身を挺した告発がここにある。自らに即した強烈な糾弾を感じた作品だった。

ていた頃」は、最近安倍首相の暗殺事件からクローズアップされた統一教会の問題を体験から描いていて、話題性は光っていた。この特殊な宗教の世界を、かなり内側の信者の立場から回顧する筆致は、確かに興味をそそる。特に、どういった人たちが信者になり、引き寄せられていくのかがよくわかる。心優しく、弱い、貧しい人たちの素顔が見えてくる。まさに「毫（こ）り取られる」者の姿が浮かび上がってくる。しかしそれをさえ癒しあう何かがある。「私にとつては、不毛でも無意味でもなかった。友達が差し出してくれた温もりだった」と記すそこに、この宗教問題の底層が覗いている。追及がここに留まっているところに限界があり、このあとをもっと掘削してほしい不足感が残ったものの、一つの本質を突いている点は、評価できた。

竹中水前氏は、タイヤ会社での海外営業に豊かな経験があり、今回はそれを十全に生かして、リビアの興味深い実情を著してきた。カダフィーの時代の政治状況を、タイヤの現地営業を通して鮮やかに浮かび上がらせている。日本企業の海外発展が、高度経済成長の原動力になり、その前線での営業の冒険を伴った苦勞を描きつつ、同時にその国その土地の異なった世界をリアルに浮かび上がらせている。このおもしろさは、国内では得られない勇躍感があり、新聞社の特派員ものよりも密着感を持って迫ってくる。こういう領域の記録をもっと大事にして、海外から日本を見

直す眼を養いたいたいものだと思わずにはいられなかった。「たたむ」という中村郁恵氏の作品は、終生親しさから遠かった姉の存在を通して、人手に渡って処分されていく両親の家の最期を看取っている。家の解体と同時に家族の解体も覚えながら、その哀惜を綴る筆は、「家」の構造そのもののへ本質的問いかけを投げつつ深められる。緻密な文章はその哀惜に彩られて、美しいまでの旋律を奏でている。ただ、この最後の場面に「ボレロ」がふさわしいかどうかは、やや疑問が残った。

今回も常連グループの活躍は、上の作品群の層を特に厚くしていたが、宮尾美明氏の「女ともだち——同志」も晩年の女性ともだちの大きな変化を書き表して、人生の模様の複雑さ・深淵さを感じさせるエッセイとなっている。大学時代の澁刺とした夢と勢いが、何十年という歳月の果てにどのように変わったか、その浮沈の軌跡の中に、むしろ深い人生の味わいがある。宮尾氏は健在で、むしろ筆はいっそう冴えていることを感じさせた。

「春風を纏った服」の菱川町子氏のエッセイは、題材は日常の身近にあるものの、ピアノを無理して習わせてくれた母親への深い追懐のうちに、残してくれた和服を新しい現代の衣装に作り直して着る、過去と現在を繋ぐ感情に細やかな味があり、魅力を醸していた。過去の愛情を作り替えて着るその繋ぐ行為の中に、愛情の糸が結ばれる。それが

現在を生き生きと動かし、また新たな力へと繋がっていくことが、その文章の背後に感じられて、読後感を快くしている。

金子亜実氏の「闘病に感謝」は、自堕落な母親はさらに鬱病にかかり、母親に苦しめられる人生を負ううちに、自分も精神的な病に陥る負の連鎖を描きながら、それを逆転の発想によって乗り越えていくストーリーは感動的だった。親友の母親の「あなたが本気でお母さんの幸せを思えるようになったとき、お母さんの病気は治るわよ」という言葉を契機に、母親を立ち直らせ、また過労で自身も危うくなったとき、逆に母親に助けてもらうやりとりは人間が心で交わる深い大きな可能性を具現化して、眩しいものがある。やや稚拙な点も残るが、更生の深い体験の記録には、深く響いてくるものがある。

奨励賞の上位には、優秀賞に劣らないレベルの高い作品が並んでいる。「海を眺めていた」(室伏三鶴)は、路上ライブをしていたとき、熱心に聴いてくれた女性と仲良くなったものの、父からの虐待、集団レイプ、援助交際、自殺未遂、PTSD(精神疾患)という過酷な過去を持つその女性の闇を共有することになる。最後、訣別したときの房総半島の海を追懐するこの作品は、確かに深い胸の痛みを刻印していた。

社会批評の色彩の強い「エミリーの慧眼」当たり前とは

何だろう(阪田光孝)も痛烈な現代への批判を藏していた。「ソーシャルメディアに群がる人々の『こころ』は

虚栄心でいっぱいよ」と言い、現代人の「こころ」の荒廃を暴いて、「自らの行為で、自己の価値を上げようとせず、他人を貶めることで、自己の価値を上げようとする」という指弾は鋭い。

「骨を拾う」(本澤章)の横書きの作品には難があったが、内容はよく、焼かれた父親の骨と、生きていた頃の父親の指先の動きが重なるラストは鮮やかだった。

「無尽燈」は京都の近所付き合ひの中に見る人間の親しい温もりがよく描けている。「人はこんな他愛もない楽しみを共有し、繋がりを確かめ合い、生きるエネルギーにするのかもしれない」という言葉は、殺伐とした現代に一石を投じている。

韓国での学生の交流で蚕の蛹の缶詰を食べさせられる「ボンデギの夜」(今井清賀)は、食物による親しさの体験によって深くなる真の交流の一面がおもしろくよく描かれていた。

「小さな握りこぶし」(はるひ)は、ウクライナの報道で見た幼子の握りこぶしから想いが連なって、太平洋戦争、原爆と、戦争の惨禍を全体に振り返って、平和への希求に大きく繋げていることに真情がこもっていて、説得力があった。

同じ反戦への思いは「ジャンケンで」(熊谷和代)も痛切で、戦争体験者の肉声は強烈なものがある。

「似非川柳も二〇〇〇柳」(佐高源)は母の遺品の中に残っていた川柳を繕いてその心にあらためて触れる深い交わりが温かく残る。

若い世代の作品「元新卒の逃走」(丹波藏堂)は最初に就職した会社の仕事が劣悪でノイローゼになり、そこから再生するあらずじだが、新卒者が陥る罠を丹念に描いて、しかもそこから立ち直る過程は、たくさんさんの若者に共通するものを含んでいて示唆に飛んでいる。

「トンネルの向こう」(ふとうちえこ)は、夫の鉄工所が倒産してから、悪戦苦闘に明け暮れ、やっと光を見る過程が描かれており、切実な軌跡が留められている。「いつか腹から笑える日が来る」「働くことは今を生き、明日声を出して笑うためであった」という吐露には、迫真力がある。「絶望から希望へ」(小倉一純)は精神病院の入院体験をよく記し留めて、そこからの回復と未来へかける希望を思いを込めて表現している。

「母の通信教育」(田中修)は、かなり歳を取ってから、通信教育で調理師資格を取り、定年まで病院に勤める母親の長い苦闘を実直に描いている。父親の過去も挿入され、両親の世代が鮮やかに浮かんでくるエッセイとなった。

「私のものがたり」(相澤真理子)は不遇な女性の孤独を

叙述しているが、鮮烈な言葉に魅かれた。「生きるための燃料になる思い出があるのとないのとは、年とってから人生の質が違ってくる」この一文だけでも奨励賞に値する。

「上野駅のホームレス」(西島雅博)はタイトルのごとく貴重な体験を題材にして興味深い。上野のこの世界を直接取り上げた作品は稀有で、それだけで価値がある。筆者の半生の輪郭をなぞりながら、このような岐路もあったことが同時に窺えるが、一過性の雰囲気があつて、上野を通り過ぎていくだけに終わっているのが惜しまれる。

「暗然たる世界に差し込む一筋の光」(木下ゆかり)はバレエを通してウクライナの戦禍に言及する。弱冠一七歳の筆者の文章はしっかりしていて、バレエの領域から、平和を希求する真摯な声は、広く響き渡っていくものがある。文章もさらに持続して鍛錬していったほしい。

「ヒトリ生きるカナシ」(森崎律子)は一人暮らしで最後に自殺する女性の内面に迫って、痛切なものがあつた。

「母と娘、そして私」(武中彩)は母子の思いの齟齬を露わに描いて迫ってくるが、もう一つ結晶度に足りないものがあるのが惜しい。もう一度推敲してほしい。

「孤高」(村松佐保)は、学者の孤独な一生に付き添う姿が温かく、それによって学問に生きる者の孤高の姿がいっそう鮮やかになっている。清らかな印象が残る。

奨励賞に漏れたが、印象に残る作品を挙げておきたい。「読書できない!」(水越晴子)、「夜道」(青海光)、「レーゾンデートルと使命」(小室澄江)、「日々是好日」(吉田宏子)、「戦争を語る父の目に涙が」(倉沢辰子)、「ささやかな人生」(秋葉岩男)、「人生の同志」(風早爽)、「小児科医の願い」(秋谷進)、「意外なメッセージ」(近藤幹夫)、「桃太郎がつかないだ学びのバトン」(雲海倫)、「絵描きの青春」(千代田さん)、「毛がに」(姉蘭浩一)、「吉右衛門の思い出」(寅次郎)、「背中の中の格調」(山家衛良)応募総数はやや少ない感があるものの、内容は極めて充実していてハイレベルだった今回。これからもこのエッセイ賞に、同じように赤裸々な体験、真摯な文章が多く寄せられることを期待したい。多くの人と共有していくべき価値ある文章、記録、主張を待っている。



佳作

「里山便り」	鶴賀イチ	「人生の同志」	風早 爽
「意外なメッセージ」	近藤幹夫	「背中の中の格調」	山家衛良
「人生に楽なし、でも楽しみ有り在り」	山田恵津子	「癌によりそう花ことば」	伊藤フサ子
「最後の日々」	田浦チサ子	「誰のマジック」	田中美晴
「雑感、または思い出す事」	鈴木信一	「最後の面会」	福田哲也
「輪っかぼつぽ」	高尾周一	「私たちの春」	高島 緑
「読書できない!」	水越晴子	「毛がに」	姉蘭浩一
「喪失したもの」	西尾 吉	「手」	山田葉里
「戦争を語る父の目に涙が」	ふきのとう	「吉右衛門の思い出」	寅次郎
「夜道」	青海光	「タラップに導かれて」	金田一淳
「愛のカタチ」	九条之子	「山の師匠」	馬場岩ひろし
「令和は身軽であれ」	三日月李衣	「叔母を悼む」	澤井樹生
「レーゾンデートルと使命」	小室澄江	「母と娘」	丸山 史
「過去と現在を行き来する」	佐藤悦弘	「日々是好日」	吉田宏子
「小児科医の願い」	秋谷 進	「別れの悲しみ」	森田麗実
「コスミック・キャンデーズ」	小林宏子	「『桃太郎』がつかないだ学びのバトン」	雲海倫
「家族について」	よまひこ	「すて塩」	家森澄子
「絵描きの青春」	千代田さん	「弁当終了」	斉藤はな絵
「ささやかな人生」	秋庭岩男	「いいよ」	武藤蓑子
「被災地での約束」	桜さく	「祖父から最後に聞いた言葉」	山口和花菜
「十度目の夏」	香山マリエ		



みずき りょう

作家・劇作家・演出家
1942 北朝鮮生まれ
99 小説「祝祭」で
第16回織田作之助
賞受賞
2006 小説「お見合いッ
アー」で第49回農
民文学賞受賞
戯曲も多数ある

終末を心豊かに生きる 高齢者の願い

水木 亮

今年の応募作品の全体の感想は、特に高齢者が自分の人生を振り返り、どうしても書いておきたいことを投稿してきた作品に心ひかれた。厳しい現実の中で希望を失うことなく、人生の最後を少しでも心安らぐ終末にしようと頑張る姿が、自分にもひしひしと伝わる作品が多かった。これこそ高齢者と歩むこのコンクールの願うところでもあり、高齢社会を生きる上で少しでも元気をもらえるなら素晴らしいことだと思う。

以下心に残った作品について感想を述べたい。

「病同・秒同」

西川かつみ

最優秀に選ばれたこの作品は、ローソクが消える前に明

「女友達——同志」

宮尾美明

青春時代を共に生きた仲間のそれぞれの人生を回想した。老いも病も新しい友達として生きる。老いの日々を生きる人々が共感するエッセイである。

次に奨励賞で私が印象深いのは、次の作品である。
「机の中の弁当」 青地久恵

お礼の小包が届いたことから、中学生の頃、弁当におかずがない男の子に交代でおかずを作ったことが思い出された。間もなくその男性は亡くなり、彼の牧場を訪れる。そこで彼がどんな厳しい暮らしをしていたかを知る。老いての恩を忘れない男性の思いが悲しい。作者にとっても忘れられない経験であったろう。

「ヒトリ生きるカナシ」

森崎律子

病んだ友人の自殺を書いた。その友人に寄り添う女性の温かい心が伝わる。厳しいなかの救いでもある。こういう最期を生きる人もいる。その壮絶な姿に学ぶものがある。

「小さな握りこぶし」

はるひ

天候の加減で北九州ではなくて、長崎に原爆が落ちたという記述に驚いた。父親と別れなければならぬ、ウクライナの子どもの小さな拳から、あらためて平和の尊さと思う「薫ちゃんに捧ぐ」 植田郁子

導人がうまい。誰の人生にも忘れられない悔いがある。

るく照らす。そんな終末を感じさせる光るエッセイで、「先生」の言葉がここにしみる。また猫との交流も温かい。「わたしが続一教会に通っていた頃」 山田まさ子
優秀賞に選ばれたこの作品は、統一教会で知り合いになった女性について書いている。時事的に話題性もあるが、そこに居場所を見つけないならなかった女性、そういう人もいるのだと知り、胸を打たれる。

「海風に吹かれながら」

春木美子

優秀賞のこの作品は、透析の現場で看護婦として働きたがら、自分にガンがみつかり病院を辞めようとしたとき、一緒に働いていたガンの病歴があるMさんに希望を持つことだと励まされ、退院後再び職場で働くこととしたとき、Mさんの姿が消えていたエピソードである。Mさんの励ましの言葉がよい。

「闘病に感謝」

金子亜実

波乱万丈の家族環境で母が病み、その看病をした自分もまた病むことになった。それを克服し闘病から得られたものに感謝して生きる。それは同じ心を病む人たちの力になると思う。

「春を纏った服」

菱川町子

「リメイクした服には心がある」とあるように、苦労した母親への恩返しのリメイクに筆者の心が伝わる、素敵なおエッセイだと思う。

学んでその悔いを超える時、人間の魅力が生まれると思う。また薫さんへの供養にもなるだろう。

「母と娘と、そして私」

武中 彩

高校生の頃、母親に暴言を吐いた。母は亡くなり、歳月を経て叔母からいかに母親が自分のことを思っていたかを教えられる。その叔母に母への孝行の代わりをした。最後のまとめがよく書かれている。

「上野公園のホームレス」

西島雅博

若き日の公園でのホームレス生活を振り返った。両親の息子に対する思いが、絶えず筆者の心の底に生きていて、障壁を超え筆者の希望する人生を励まし続けたと感じた。

以下心に残るエッセイについて触れたい。

「日々是好日」

吉田宏子

老いて壊れてゆく夫の様子を書いた。誰にも訪れる終末。老いを生きる上で誰もの参考になるエッセイだと思う。

「愛のカタチ」

九条之子

いろいろな「愛のカタチ」を書いた。ラストの葬儀のエピソードに筆力を感じる。

「人生の同志」

風早 爽

人生はままならない。老いて再婚した妻が病む過程を書いた。今度は妻に寄り添うことに尽きると思う。

「被災地での約束」

桜 さく

入選

- | | | | |
|----------------|---------|----------------------|---------|
| 「褐色の世界 ベルベル人」 | 松原泰子 | 「古代・洛東江の畔」 | 崔宣葉 |
| 「迂回して、秋」 | そろかどましろ | 「ねじれの位置からいろいろ想像してみた」 | ふじもとなおこ |
| 「訛りと方言、丸出しで」 | 三木亮介 | 「レムとノンレムからの解放」 | 柴田節子 |
| 「風の盆」 | 比留間 進 | 「『軍国少年』の遺言」 | ゴルビー長田 |
| 「褒め上手」 | 有澤かおり | 「夢電話」 | 山田じゅんた |
| 「『時代おくれ』に目覚める」 | 平野靖雄 | 「おい、元氣かい」 | 伊手人首麻呂 |
| 「不婚」 | 長坂弥生 | 「マンガの美のなる村で」 | 中西淳子 |
| 「神の石」 | 岡 大吉 | 「キーキ一切れの悲しみ」 | 藤野璃子 |
| 「いのちの燈火」 | 津森悠平 | 「双眼鏡」 | 吉原あやこ |
| 「障害がもたらす家族の絆」 | いっちゃん | 「鎌打ち神事から始まる」 | 明石弘貴 |
| 「住まば都 住めば都」 | 秋葉みのり | 「手紙」 | 谷垣宣長 |
| 「芸術の世界」 | 佐田真紀 | 「イヤホンが便所に流れた時の話」 | 白田イルマ |
| 「父と競馬」 | 次女 | 「墓をさがす」 | 高木敏克 |
| 「十八歳一ヶ月の苦悩」 | Samon | 「愛生傳命」 | ゆきまろい |

被災地の人々を励ますために訪れた筆者の、貴重な不思議な体験をかいた。被災地に寄せる思いがあつたからこそ、経験できたことであろう。死者の魂を感じる。

「ジャンケンで」 熊谷和代

戦後七八年を経た日本。戦争を学ばない国民は操作する政治家の言いなりになる。戦争体験者がこうして、戦争を語るのは老いを生きる上でとても大事なことだと思う。

昨年を書いたが、人間一度きりの人生を悔いなく終える



つづき たかひろ

1978 山梨県生まれ
東海大学文学部卒
2002「看板屋の恋」で第91回文学界新人賞受賞
「狼を見る」(文芸思潮)
「ご眷属様ジャーニー」(三田文学)他「長者屋敷の寝られぬ座敷」(合作)で佐々木喜善賞など 構成作家としても活動中

暗くて深い井戸の底……

都築隆広

毎年、「最も良かったエッセイ」と「最も印象に残ったエッセイ」が異なる。

私が「最も良かった」と思う作品は、そもそも最優秀賞に選ばれにくい気もするが、「最も印象に残ったエッセイ」は大体、活字にできるだけの公共性に乏しく、選考会以前に落選してしまう。そういった作品に触れることができるのも、下読み委員を兼任することの醍醐味というか、役得といえよう。ところが、今年はそのどちらもが上位に入賞している。珍しい結果だ。

最優秀賞の「病同・秒同」と「故郷に私はいない」は共に高評価を付けたものの、「最も良かった」かと尋ねられ

ために、自分の一生で忘れられない思い出を記録することは、その人の人生の終活でもある。記録しておけば誰かが読む。「文芸思潮」がシニアの意見に重点をおいているのは、いまだ日本で珍しい文芸雑誌である。今回も貴重な経験を書かれた高齢者の作品が多かった。来年もいろいろな作品を読みたい。



たら疑問が残る。「病同・秒同」は限られた日々を生きた人々の軽みや明るさがあつて、好感が持てた。ただ、文芸誌の掲載作にいかにもありそうな人間関係で、少々、地味にも感じられた。「故郷に私はいない」は、ある身体的特徴から、この人ならではの苦悩に苛まれる話。個人のコンプレックスが、社会性のある問題提起へと昇華されてゆく点が、エッセイとしてバランスが良い。

優秀賞「北緯5度の島の原爆人形」は最近、国家破産したといわれるスリランカでボランティアで原爆人形劇を公演して回るという内容。海外で出会った人々のことが帰国後に心配になるというのはよくある話で、国家破産した国の人々ともなればそれはひとしおだろう。最優秀賞にふさわしいと断じたものの、選考会では「ドラマ度が低い」と、ものいいがつき、弁護しきれなかった。

同じく優秀賞「眼、あるいは光について」。ボヤ騒ぎを起こして家を出て、友人達とルームシェアをする青年の、益体もない日々が詩的な文章で綴られる。作者は言語聴覚士なる職に就いているようで、言語感覚に優れ、並々ならぬ文体へのこだわりを感じる。私はこの作品が最も良かった。とはいえ、万人に受け入れられるとはいいい難く、上位入賞できてめでたし、といったところか。

では「最も印象に残ったエッセイ」は何か。これまた優秀賞「Gちゃんの小指」。いつも牡丹鍋を振る舞ってくれ

第19回 文芸思潮エッセイ賞 作品募集

文芸思潮では広くエッセイを募集します。日々の暮らしのなかでの思い、様々な体験、ユニークな視点、痛烈な批判、残しておくべき重要な記憶・記録など、自由な随筆作品をお寄せ下さい。聞き書きのような、他の人の語りをまとめたものでもけっこうです。短文の世界に言葉の自由な翼をひろげて多くの人に語りかけてください。優れた作品は、「文芸思潮」誌上に発表し、インターネットにも載せて、永く保存します。

文芸思潮エッセイ賞作品募集要項

趣旨●随筆文学の顕彰によって文芸創作エネルギーを活性化する。短文学の才能や稀有な人生体験・世界観を掘り起こし、それぞれの生活に密着した記録を保存するとともに、広く社会に知らしめ、文芸の興隆に寄与する。

募集内容●オリジナルのエッセイ作品。ただしこれまで同人雑誌に発表したものを改作したものも可。一人一篇に限る（複数作品応募者は失格）。

応募規定●4000字以内極力パソコン印字で（原稿用紙手書きの場合は必ずA4原稿用紙を）

※応募原稿は返却しないので、コピーを取り、コピーの方を送付すること。

パソコン・ワープロ原稿はA4用紙40字×30行で印字。必ず右上を閉じること。

別紙に①応募部門（2024第19回「文芸思潮」エッセイ賞応募作品と明記）②タイトル③本名およびペンネーム④ふりがな（どちらにもふりがなを）⑤年齢・生年月日・性別⑥住所〒（必ず郵便番号を明記のこと。ないものは失格）⑦電話番号⑧職業・略歴※①～⑧でこれらが厳守されていないものは失格となる。

応募審査料●1800円を郵便為替（郵便局で購入）で同封のこと（為替には無記入・無押印）。

外国からは14USドルを同封。切手も可。郵便為替1000円+切手800円可（外国切手不可）

応募先●〒158-0083 東京都世田谷区奥沢7-15-13 アジア文化社

「文芸思潮」エッセイ賞係

TEL03-5706-7847 FAX 03-5706-7848

E-mail bungeisc@asiawave.co.jp

賞●最優秀賞■賞状・トロフィー・賞金10万円（2名は7万円／3名は5万円）

優秀賞■賞状・賞メダル・賞金3万円（4名以上は2万円）

奨励賞■賞状・賞メダル 佳作・入選■賞状・記念品

選考委員●三神弘・水木亮・都築隆広・五十嵐勉

締切●2024年3月31日（当日消印有効）

発表●予選通過作品発表は2024年6月25日発売の「文芸思潮」92号、またインターネット・ホームページでも行なう。最終結果・最優秀作および優秀作は2024年9月25日発売の「文芸思潮」93号に発表掲載。奨励賞も順次「文芸思潮」に掲載する。

主催●文芸思潮

※主催者から 日々の中に埋もれている強い思いや記憶、味わい深い生活感、残しておきたい体験、矛盾に満ちた人生への痛切な抗議、体験に基づいた現代への鮮烈な視点など、あなたの真の声を乗せたエッセイ作品をお寄せください。



る優しい祖父。成長した孫に、祖父は普段の姿からはかけ離れた、おどまじき戦争譚を語る。この手のエッセイは反戦の意図のうえに書かれ、読まれるべきものだ。だが、祖父の打ち明け話はあまりに凄まじく、人間の暗い欲望を刺激させる。溢れ出る嗜虐性は、暗くて深い井戸の底を覗き込むような感覚に読む者を陥らせることだろう。これは本当に反戦エッセイなのか。描きたいのは、戦場に吞まれた人々の醜い欲望の方ではないのか？ その危うさが本作の魅力であり、欠点とも感じられた。

常連投稿者、山田まさ子さんの「わたしは統一教会に通っていた頃」も優秀賞。例年なら支持していた山田さんのエッセイだが、今年は反対の立場をとった。というのも、冒頭に安倍元首相の暗殺現場を見物に行く場面があり、そこに倫理観の欠如が見られたからだ。社会を揺るがす事件で、元首相という肩書も相俟って、人間一人の命が失われている点がばやけているようにも読める。後の統一教会についての部分は選考会では評判が良かったものの、やはり山田さんの本質は私小説風エッセイであり、時事的なテーマが絡んでくると素直に楽しめなかった。

邪悪な姉と、潰すことになる家についての思い出を描いた優秀賞「たたむ」、モラハラ夫と問題だらけの職場に悩む、奨励賞「私のものがたり」。顔見知りの自分を痴漢する「ケロさん」と彼に恋する「薫ちゃん」に挟まれる苦難



の人間模様、奨励賞「薫ちゃんに捧ぐ」、家事をせず、性格も悪くなった夫を描いた、奨励賞「私の好きな深蒸し茶をどうぞ」。特に「たたむ」「私のものがたり」「私の好きな深蒸し茶をどうぞ」の三作は同一作者のものではないかと思える程、家庭内の悪意や不快感が巧みに描かれていた。

心の暗部といえば、死を願う人々の胸の内もまた仄暗い。奨励賞「ヒトリ生きるカナシ」は自殺する「七子さん」の手記が生々しく迫ってくる。こう書いてゆくと今年は暗いエッセイばかりのように感じられるかも知れないが、むしろ逆で、全体的に闇の中に希望の光を見出す作品が多かった。

「昼の光に、夜の闇の深さがわかるものか」というのは、ニーチェの言葉だ。他人の暗部を覗き、書きとめたくなるのは人間心理としてわかるから、ペンをとる発端はそれで良い。ただし、固執し続けると、読者にもストレスを与えてしまう。市井の人々にまで、自分の声を届けたいと願うのなら、暗い井戸からはいつかは眼をそらし、光の差す方に、ゆつくりと歩を進めるべきであろう。

病同・秒同

西川かつみ

秋の深まる匂いがした。

雨の降る前の少し湿った甘い匂い、桜の甘みを微かに含んだ春の盛りの匂い、若い頃に友人達と行った盛夏のキャンプで、笑うように吸った雑草の暑い草いきれ。そんなずつと忘れていた匂いの記憶が私の胸に蘇った。

「にゃあ」

秋草の種を顔面と身体いっぱいにつけて愛猫が、肌寒くなった夕風といっしょに帰宅したのだった。私の頬に冷えた鼻先を擦り付けて。乾いた草の種の匂いと、どんな殺生をしたのか、少し生臭い血の匂いをまとって、布団に横たわった私の顔にその枯れ草の匂いごと身体全体を押しつけた。

「抱っこがいいの？」

声をかけながら、小さな可愛い殺戮者の冷えた体を、両手でぎゅっと抱きしめた。

「ぐーっるぐーっる　ぶっしゅ」

「おるかゝ大根間引いたの置いとくぞ。胡麻あえにしたら身体にええぞ」

玄関で声がした。近所のIさん。野菜の作り方を教えてくれた方で、私はIさんのことを勝手に先生と呼んでいた。

「ありがとうございます。先生今行きます」

「無理せんでええ、寒うなってきたから、温うして寝えよ」

「先生、大根の間引き、手伝えなくて、すみません」

「そんなええ。温くして寝とれよ。大丈夫やから」
大丈夫やからという言葉に涙ぐみそうになりながら、上着をはおり、急いで玄関にまわると先生の姿はもうなかった。車のエンジンをかける音に混じって、外で誰かのひどく咳き込む音が聞こえ、私は思わず、

「先生、大丈夫ですか？」

と叫んだ。玄関の上がり戸の傍に、根っこも土も綺麗にそうじされた大量の大根の間引き菜が玄関灯に輝いていた。

「先生」

玄関戸を勢いよく開けると夜風がどっと吹き込んで来て、私は上着のえりをぎゅっと堅くよせ閉めた。外にはもう誰もいなかった。

「大根は身体に良いみたいね」

主治医が作ってくれた食養生用のメモを見ながら、私は

返事代わりの鼻水まじりの喉音が、抱っこに満足していることを伝えてくれ、長い一日を布団で過ごした私を、今日、初めて笑顔にしてくれた。

どのくらいそうしていたのか、窓の外で夕方の光が消え、夜の闇がすっかり覆っていた。

「大丈夫だから。ね」

深い意味なくそう語りかけても、ぐーっるぐーっるの喉音を高くしてくれるのが楽しくて、床についてからというもの、私はほぼ毎日、おまじないのようにその言葉をとなえながら彼を撫でた。

「大丈夫。何にも心配ないよ。何があっても、お前はずつとお腹いっぱいご飯が食べられるからね」

そう付け加えると、彼は一瞬、喉音を止め、まん丸い目でじつと私を見上げて、それからすぐに、また今度は少し大きめの喉音を立て始めるのだった。

猫に笑いかけた。

「今夜は、間引き菜の胡麻あえと、玄米の焼きめしにしようね」

その日初めての料理らしい料理。台所に立った私のふくらはぎに、猫は嬉しそうに身体を擦り付けた。

「さ、いっしょにご飯しよ」

猫缶をお皿に開けて床に置き、一番低い机に胡麻合えと焼きめしを並べて置いた。たくさん作れた胡麻あえは明日のお弁当にも入れよう。娘の好きなメニューだ。

「先生ありがとうございます」

皿に盛られた猫まんまをハグハグと嬉しそうに食べ始めた猫の頭を撫で、

「いただきます」

ともう一度を手を合わせて箸をとった。

夫と娘は、今日は外で食べるから遅くなると言ってくれた。私が病を得てから家族は家事の量を少しでも減らす方へとがんばってくれていた。布団から出るたびに、家のどこかが掃除され、洗濯や片付けがなされていた。

「幸せだね」

猫に声をかけた。固形物を消化するのに苦戦して、いつもギリギリと差し込むように痛む内臓も、その日は少しましに思えた。

一昨年の秋は、お腹はまだ今ほど痛まなかった。

「新薬が間に合えば、助かる可能性もありますから」主治医が小さく明るい声で、下をむいたままそう言われた。

どう返事をしてよいかわからず、もじもじと曖昧な笑顔を主治医に向けた時だった。背筋を伸ばし、強い視線で私を見ながら主治医がもう一度口を開いた。

「あなたも分かっているとは思いますが、ステージ4の癌はなおらないんです。すべてはすこしでも延命するための治療となります」

一気に言い終えた主治医の口から、ヒューというため息のような音が響いた。

窓の外の木枯らしが、隙間の多い我が家のどこかでヒューヒューと主治医がもらしたため息に似た音を立てていた。

「あれから二年たったんだねえ」

膝に戻った猫を撫でた。大根の胡麻あえだけを痛む腹をなだめながらどうにか食べ終わると、焼きめしを残そうとラップを手にとった。

「にや」

突然、猫がラップを手にした指を軽く、それでも菌形が残る程に噛んだ

「え、食べないとだめって？」

猫も焼きめしが食べたいのかと思ひ、手のひらに載せて

差し出しても口にしようとはしない。その上、焼きめしを載せたその手の別の指を、今度は少し強めに噛んできた。痩せ細ったこの仔を家の側溝で拾った時、他の三匹の兄弟猫達はすでに餓死し、虫がわき始めていたのを思い出した。

「わかった。食べるからもう噛まないで」

猫に見守られながらゆっくりと口にする焼きめしは、思ったほど腹に苦痛を与えなかった。

三十分ほどかけ完食し、空になった皿を猫に見せた。

「少し、元気が出ました。ありがとうございます」

先生になのか、猫になのか、小さくお礼を口にする、猫はさ自分のおかげという風にプシュンと鼻を鳴らした。

十月中旬、木枯らしの吹いた寒い午後、玄関に郵便物をとりに出た玄関先に、大きく育った泥だらけの大根の山がおかれていた。添えられたメモには、

「洗えてなくてすまない。干して保存食にしてください。しばらく入院することになった。畑はお手伝いの人を頼んだから、気にしないでよいです」とあった。

「先生……」

電話をかける手が震えた。ずっとひどい咳をされておられたのだ。気がついていたのに、私はしてもらえばかりで何も返さなかった。どうかひどい病ではありませんように祈るような気持ちで先生に電話をした。

「肺癌や。でも、薬でおさえてすぐに帰るから。大根は三週間干したら味見したいし、持ってきてくれるか？ それまでに治って帰るから」

元氣な声で先生は言い切った。私はその言葉を信じるフリをした。

一ヶ月たっても先生は家に帰らなかった。

病院で面会のできないコロナの条件の下、電話で安否を窺う度に、先生は逆に私を元気づけるような話をしてくださった。この土地の性質に合う野菜の種類、苗作り、寒暖差のあるこの地特有の作付けの方法。一通り習ったつもりだったのに、まだまだ知らないことだらけだった。そして電話の最後はいつも、

「畑にでるのは、しっかりご飯が食べられた後だけにしなさい」

「苦しい時も、学問はできるかぎりすること。習気（しゅうき）といって、身についた知識はこの世だけでなく、来世でも自分を助けてくれるから」と言われた。

日々、死ぬことの恐怖を抑えきれないでいた私に、自分の心身の声を毎日丁寧（丁寧）に聞き、そして人は遅かれ速かれ死ぬのだから、死ぬということに甘えてはいけないことを、教えてくださった。

最後の仮退院の日、お会いした草に覆われた先生の家の庭で、先生は笑っておられた。

「草が私に刈られないから、幸せそうだ。世の中は上手くできているね。だから、私がいなくなったら、畑が草でぼうぼうになっても、気にしてはいけないよ。」

とカラカラと楽しげに声をあげて笑われ、山を削って開墾された時の事故で指二本だけが残された右手を差し出された。私は両手でその手をにぎった。先生の右手は小さく震えていた。泣くまいと思っていたのに、込み上げる嗚咽を奥歯で噛みつぶした。

お棺の中の先生は、優しく静かな笑顔をされていた。

「いつまで生きられるのだろう」

末期乳がんを得た当初、私は何日も眠れぬ夜を過ごした。自身の心身を痛め、死期を早め、何も良いことを生まないことを頭でわかっていても、苦しむのを止めることができなかった。

先生がおられなかったら、今でも私はその地獄から抜け出せないでいたと思う。

「病同」

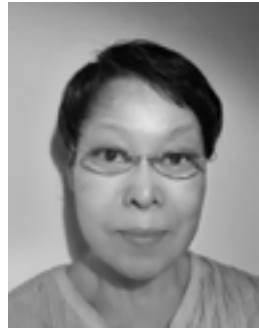
「これはびょうどうとよむんだよ。僕の造語だね。病を得て少しは謙虚で深い人間になれたような気がするよ。それにどんな状況でも人の根源的価値は変わらないと心から願っている。身体を損なった分、見えないけれど心に蓄えられ



西川かつみ

にしかわ かつみ

京都府立北桑田高校数学教諭
夫と娘と猫二匹で京都府南丹市に住む。
京都市より農業を家族で学ぶため、12
年前に南丹市に移住。平日は教壇、日曜
は家族と畑で過ごす。趣味は農作業と娘
に聞かせる物語をつくることと、あんこ
を食べること。
2019年より乳ガンステージ4サバイバー



受賞の言葉

西川かつみ

この度は身に余る光栄をいただき、大変ありがたく深く感謝しております。農村で日々の暮らしを細々と営む身に霹靂とも思える病を得て、始めて人生や生きるということを考える機会を与えられました時、このエッセイの募集を知り、自分の心を整理する意味で投稿させていただこうと思いにいたしました。

自分の意に反して、日々衰えてゆく肉体。それでもどんな状況にあっても自分には人として根源的価値があるのだという願いを受賞という形で支えていただいた事、本当にもったいなく、深く感謝しております。思えば人はすべて「死」は確定の事実なのだという当たり前のことに、人生の師であった方に気づかされ、励まされ、今はただ「今日の日」を十分に味わって生きるのみとの思いを心に、一つでも多くを学べたらと前に進む日々です。畑には先日、新しい秋苗を植えました。収穫できましたら、受賞の報告とともに、先生の墓前にそなえたいと思っております。本当にありがとうございます。

たものが増えたような気がする。

それと、今生だけでなく、来世も考えるとね、修行の前払いをただけかなと思うと、かえって得をしたんじゃないかな。こんなに正々堂々と仕事を休めたのは人生初めてだ。全部病のおかげだからね」

「長生きだろうと、少々早くこの世を去ろうと、今この瞬間を生きているということに違いはないから、同じだねえ」「秒同だな。ははは」

先生は最後の数週間、いつも言葉を言い終わるとカラカラと本当に楽しそうに笑われた。釣られて私もいつも笑って、幸せな気持ちで会話を終われた。幸せな最後の授業だった。

冬が過ぎ春が来て、私は薬のおかげで散歩ができるようになった。先生の畑だったところは草だらけとなり、かつて山のようにとうもろこしや麦や芋を収穫した跡形も、今は全くなくなっていった。青空の下で、背の高さを越える青々とした草がさわさわと風に揺れていた。

「先生見えますか、草も私も幸せです」

「明日は明日の幸せがあることに感謝いたします」
空と大地に私は祈った。

故郷に私はいない

坂本 崇

鏡に映っていたのは知らない人間だった。額から鼻にかけての隆起、それから唇の膨らみで弾んで顎へと降りていく輪郭は、けれど確かに私のものだった。新幹線の洗面所に備え付けられた三面鏡で、初めて自分の横顔を目の当たりにした私は、その時どうして自分が「外人」と呼ばれるのか理解した。十四歳——思春期の真っ只中で、少しずつ身体も精神も大人のものと変化し始めた時期だった。

「外人」と呼ばれることには小さな頃から抵抗があった。母が日本人でないのは知っていた。けれど日本で生まれて日本で育った私は、自身のことも当たり前のように日本人だと思っていた。それに当時は言葉もまだ日本語しか話せなかった。だから私には日本人離れたその自分の横顔がよほど衝撃的だったのだと思う。修学旅行で福岡へ向かっている途中だったが、おかげで肝心の旅行については何も憶えていない。

「アイデンティティ」とは「自己同一性」と訳されている言葉で、自分が自分である感覚、またはその自分がその通りに社会や集団から認識されている感覚を指すのだという。日本という単一民族からなる国に暮らしていた私は、その感覚が一度も一致した経験がない。顔つき、体つき、体毛の濃さ。特に十代という多感な時期に、身体的な特徴が他の友達とも大きく異なり始めると、自分でも自分のことを「外人」と思うようになった。

そんな「外人」がどこか遠くへ居場所を求めるのは至極自然な流れだろう。私はいつしか外国に住みたいと思い始めた。だから必死で英語を身につけて、大学を卒業してからさらに何年か経った頃に、ようやくその夢を叶えた。

日本を離れてもう十年になる。

どこかで犬が吠えている——そう思った矢先、背後で誰かがこう言った。

「こいつらみんな、犬に噛まれてまえばええんや」

振り返ると、ポロシャツ姿のおじさんがハンカチで汗を拭っていた。何年か前の京都のこと。季節は夏だった。

私は一時帰国して観光をしている最中だった。

その日の最高気温は四十度以上。まだ午前だというのにすでに燦々と降り注ぐ重たい陽射しは、これから予報通りさらに暑くなる予感を含んでいた。にもかかわらず、祇園の花見小路は外国人観光客で溢れ、英語や、中国語や、イタリア語や、インド語が、前の晩の鴨川の花火みたいにあちこちから聞こえていた。古い日本の風情が残る街並みが嬉しくてたまらなかったのか、写真を撮るために突然立ち止まる観光客もいて、しばしば小路の両脇に行く人の流れが滞っていた。

その言葉を耳にした時もちょうどそんな時——目の前で欧米人のカップルが自撮りを始め、私が立ち止まった時だった。おじさんはそれからもしばらくの間外国人たちの文句を言い続けて、小路の突き当たりで建仁寺の方へ消えていった。

それから私は重たい気分で清水寺まで歩いたのを憶えている。その言葉に込められた生々しい嫌悪を、不意に耳にしてしまったことが落ち込みの理由の一つ。されどそれ以

上に、また自分が外人扱いされたことへの落胆が主たる理由だった——きっとそのおじさんは周りに日本人がいるとは思ひもしなかったのだろう。だからすぐ先を行く私のことも、外国人観光客の一人だと信じて疑わなかったのだ。もし誰か一人でも日本人が紛れていると知っていたなら、彼はそれでも「犬に噛まれろ」なんて口に出来ただろうか。

外国へ出ていった時、私はいつそのこと本当に外人になったか。つまり外人ばかりがいる場所、私の外見をそのまま受け入れてくれる場所を探していた。しかし蓋を開けてみれば外国でも私は「外人」に変わりなかった。日本では大きいと言われていた目もヨーロッパでは小さく、顔の作りも平坦な部類。

「中国人かな？」

「いや、日本人かも」

「まあ、どのみちアジア人だろう」

差別的な扱いにも何度も遭遇した。日本の外でも、私のアイデンティティへの悩みは解消されはしなかった。

けれど外国での生活は、少なくとも母国について肯定的に再考する機会を与えてくれた。異なる文化に強いられる。噛み締める苦労は、日本の良し悪しを炙り出してくれた。自身の内に眠る数々の「自明」を私に疑わせた。慣れない

スパイスやハーブの味でさえ日本について考えるきっかけとなった。

やはり故郷は日本にしかない——そのうち私はそう考えるようになっていた。結局のところ私には日本にしか自分を形作る思い出はなかった。

それでも、あの国はいつも私から遠い。近づいたと思っても実際には遥か遠く、そして今もなお、毎秒目まぐるしい速さでさらに遠ざかっている。

「犬に噛まれろ」というほど差別的でないにしても、最近帰国するたびにそういう言葉をたくさん耳にするようになった。「通じないと思われて囁かれ、でも本当はしっかりと聴こえている言葉」のことだ。そして年々その頻度は増している。

例えば新幹線の券売機の前で手間取っている時、後ろから「早くしろよ」と愚痴られたことがある。「買いた方がわからないならみどりの窓口で買えよ」

日本人相手には絶対にそんなこと呟かないだろうに。

他にも相撲観戦に訪れた国技館で、すれ違いざまに「なんで外人がチケット取れてんの?」とか、バスの中で吊革を握る私の腕を見て「やっぱ外人って毛深いなあ」とか、お好み焼きを鉄板から直接ヘラで食べているだけで「あの

外人すごい」とか。挙げればキリがない。彼らには「もしかしたら伝わってしまうかも」という危惧が全くない。

昔は違った。昔は私がハーブであつても、こんな言葉を耳にした憶えがない。確かに友人から揶揄されて「外人」と呼ばれることは日常茶飯事だった。地域の祭りで酔っ払った大人から、何かしらの蔑みを込めてそう呼ばれたこともある。けれど、それらは少なくともまだ私に聞こえるような意図されていた——そしてその意図のおかげで、たとえ外人扱いされてもなお、私はまだ周囲から日本人として認識されているという感覚を抱くことができた。

けれど私はもう完全に日本人とは見做されなくなった。この十年で日本も著しく国際化したと言われているのに、実際は以前より増して、内と外を隔てる線が厳格に引かれるようになってしまった気がする。

「容姿が少しでも異なれば即ち日本語が通じない」という暗黙の了解でもあるのか、今では私はいつも外国人観光客だと思われ、どこにいても必ず英語で話しかけられる。親切のつもりなのだろうけど、例えば頼んでもいない英語の道案内に時間が奪われる。成田空港に到着して「YOUは何しに日本へ」の撮影クルーに英語で訪日理由を尋ねられたこともしばしばある。電車を待っている時に「英会話の練習に付き合ってくださいませんか」と会社員風の男性にせがまれたことだってある。

一方では不快な日本語に晒されて、もう一方では英語で話しかけられる。「私」という日本人はこうしてまた行き場をなくし、そして仕方なく日本を去る……

外国で私はまだ文化の壁や言葉の壁に苦しんでいる。ホームシックにもよくかかる。何年経とうが外国人ゆえの困難に直面してばかりいる。それでも私が日本に戻ってこないのは、おそらく外国でしか私は日本人になることができないからだと思う。

それにしても、あのおじさんは今頃何をしているのだろうか？

わからない。けれど自分が発した言葉などとうに忘れて、今日もまた、日本のどこかで寝て起きて、日々を暮らしているに違いない。私という存在に一欠片の想像力を割くこともなく。

あの日、彼は夫婦で京都に観光に来ていた。ひどい暑さに晒されながらスミーズに歩けず苛立っていたのだとは思いますが……外国人の姿の一体何が彼をそんなにも苛立たせたのか、それは私には一生解けない謎だ。

彼にもきつと切実な思い出があったのだと思う。そしてその思い出とはきつと故郷のことでもあって、その思い出が、その故郷が、大量の外国人たちの姿で汚された——あの時彼はそう感じたのかもしれない。美味しいご飯を食べ

て育ち、親しい仲間と駆け回って遊び、愛しい人と手を繋いで歩いたこの日本の風景の中に、元々いなかったはずの人たちの姿をたくさん目にして、彼は傷ついたのかもしれない。

けれど、その故郷は私の故郷でもある。私も同じ日本の中で彼と同じようなものを食べて、同じような言葉を話して、同じような風景を見て成長した。

本当に不公平だと思う。私の故郷に彼はいるのに、彼の故郷に私はいない。

去年の冬のことになる。コロナ禍の入国制限が緩和され、私は三年ぶりに帰国した。地元の広島で路面電車に乗っていると、四、五人の小学生たちが恥ずかしそうに「ハロー」と声をかけてきた。顔を向けると彼らは私に紙を一枚手渡した。その紙には、英語の授業で街に出て、外国人に英語で質問をしているということが書かれてあった。

「ごめん、日本人なんだ」

そう日本語で伝えると、彼らは驚いた表情を浮かべて申し訳なさそうに去って行った。

後日友達にそのことを話すと、どうやら私は大人気ない行為をしたらしい。「英語を話せるのであれば話してあげればよかったのに」と言われた。

けれど私はそうは思わない。

いわゆる日本人の容姿でなければみんな外国人という考えは、やはり間違った思い込みだ。安易な内と外の線引きは見直されるべきだし、それにあの子供たちにとっても良いきっかけだったのではないかと思う——彼らの故郷にも今やいろいろな日本人がいるのだという、最初の一步。去っていくその子供たちの後ろ姿を見ながら、私は今度から英語で話しかけられても日本語で返そうと思った。言葉が通じないと思われる日本語で何かを囁かれても、日本語で介入してみようと思った。遠くに浮かぶ日本を自分の側へ手繰り寄せる、ささやかな抵抗として。



坂本 崇

さかもと たかし

1982年広島生まれ
2019年イギリスダラム大学考古学
科博士課程終了（後期旧石器時代の
洞窟壁画専攻）。現在は大学を離れ
イタリアに移住し、日々の生活に追
われながら小説家・文筆家を志し文
章を書いている。

受賞の言葉

坂本 崇

このエッセイを書きながら考えていたのは、排外的な態度への異議などではなく、むしろ現代が持つある種の「無常」についてだった。技術が発達し、人の移動が世界中で活発になり、私たちが子供の頃から親しんだ景色は大きな変貌を遂げた。日本という国もまたその変貌の中にあり、誰もが一樣に思い浮かべられるような姿はもはや存在しない。思い出に執着を持たない人間だけが今の世界を無条件に肯定できるのだろうか、私は違う。「犬に囁かれろ」と呟いたあのおじさんもきっと違う。この意味では私も彼も等しく故郷を失ったのだと思う。私の思い出と彼の思い出と、どちらが優先されるべきなのかはわからない。ただし、この無常な世界にあつて、私には新たに生まれた内と外の対立の、そのどちらにも属せない心細さを誰かに打ち明ける場所が必要だった。その場所を与えてくれた審査員及び編集者の方々にあらためて感謝申し上げます。



新刊

文豪の死には、作品を越えて人生に深く問いかけるものがある。文豪が残した最後の言葉——それは生きることの深さとその意味を投げかけてくる。文豪の赤裸々な魂に触れる貴重な遺言集。

文豪の遺言

木内是壽



坪内逍遙 尾崎紅葉 樋口一葉 森鷗外 田山花袋 泉鏡花
国木田独步 夏目漱石 島崎藤村 芥川龍之介 永井荷風
谷崎潤一郎 志賀直哉 有馬武郎 武者小路実篤 菊池寛
宮沢賢治 川端康成 小林多喜二 大佛次郎 岡本かの子
吉川英治 太宰治 井上靖 三島由紀夫 松本清張 遠藤周作
吉行信子 司馬遼太郎 寺山修司 向田邦子 中上健次 他

アジア文化社

1728円（税込）送料サービス

2017.9.1 出版

印刷文字の複製を禁じます

作家の遺言は、死に臨んで純粹に自己と向き合い、飾り気のない一人の人間として自己の意志を発露している。それは作家自身の素顔に迫るもので、死にざまは生きざまに通じる。

Gちゃんの小指

渡辺 勝

ウクライナで民間人が虐殺されているなどというニュースを聞くと、祖父のことを思い出す。

母方の祖父は、信州の山の中にひとり住んでいた。祖母を病で亡くしてからは農業の傍ら狩猟もする生活を続けていた。

小学校五年に上がったばかりの春の、ある土曜の日だったと思う。私は父に連れられて、祖父の家に泊まりに行った。私にとって祖父は「お爺さん」でも「おじいちゃん」でもなく、あくまで「Gちゃん」だった。それは物心ついて以来、祖父に逢うたびに胸にGのマークのついたヤッケを着ていたからだ。父が「お義父さん、ジャイアンツファンですか？」と尋ねたこともあった。

祖父の家は、その頃でも少なかった藁ぶきの家で、日露戦争の頃に曾祖父が建てた家と聞いていた。昔の養蚕業の名残りで、屋根の上には煙を逃がす小屋根もついていた。

「お義父さん、やっぱり猪肉ってのはちょっとクセ、ありますね」

「そうじゃろ。野生のもんだからなあ。でも、その臭みも慣れるとたまらんじゃよ。特に秋の猪ならヤマイモ食ってるからなあ、腸の中にイモが残っておってな、それを腸ごと炭であぶって食うと、そりゃ、また格別」

私は父の横できちんと正座させられていたが、時折、祖父がやさしい視線を投げかけてくれた。

「旨いか、マー坊（祖父は私をそう呼んでいた）、ごはん、おかわりせい」

「Gちゃん、戦争で敵と戦った？」

祖父は中国に従軍したと母から聞いていた。

「ああ、戦った」

「敵、撃った？」

「撃った。が、Gちゃんはへたっぴいで、いくら撃つてもちつとも当たらんじゃった。上官から、うーんと叱られた」祖父は目を細めて笑った。

「今から思うと、当たらんで良かった。その代わり……」

祖父は両手の小指をくっつけて見せた。右の小指は左の小指の半分くらいしかなく、先っぽは丸くなっていた。

もちろん以前から片手の小指が短いのは知ってはいたが、子供心に何かの事故だろう、と思っていたのだ。

「敵のタマが……」

蚕の食べる桑の葉を消毒する必要もあって囲炉裏や竈（かまど）を使ったと聞いた。

北側と西側が林で、南は眺望がよく、眼下に千曲川（ちくまがわ）が蛇行する風景が見え、広い庭には樺（けやき）の太木が亭々と聳（そ）えていた。

夏でもひんやりする土間には、その日、剥（は）いだばかりの猪の毛皮が所々に血がこびりついたまま置かれ、えっと目を見張った。

居間の囲炉裏の自在鉤には鉄鍋が仕掛けられ、獲ってきた猪の肉で牡丹鍋をふるまってくれた。春菊、長ネギ、玉ねぎ、ゴボウ、焼き豆腐などと共に猪肉を入れ、甘口の信州味噌と合わせて、くつくつと煮込むうちに、旨そうな香りが小屋根の吹き抜けへと広がった。

腹がぐうと鳴った。

祖父と父は焼酎を飲みながら語り合っていた。

父もギョツとした表情で小指を見つめていた。

それから八年の時を経て、私は大学に進学すべく上京した。既に学生運動は下火になってはいたが、それでも大学構内には左翼学生によって大きな立て看板が置かれていた。曰く「日帝主義反対」「自衛隊は違憲」「憲法断固守護せよ」。田舎で、のほほんとノンポリで育った身には、ピンと来ない文言であったけれど、さすがに大学生にもなってまったく政治状況に無知というわけにもいかず、語学クラスの級友らと居酒屋で議論することもあった。こんな内容だった。

「陸・海・空、軍隊はこれをもたず、と憲法に明記されているのに、なし崩しに自衛隊なんてつくって。戦車も戦闘機もそろえてアレが軍隊じゃねえっていうのか」と一応進歩派を自任する一人が口火を切ると、大学に入学する前に自衛隊にいたという別の一人は「何をいつてる！ 世界中で丸腰でいる国があるか」

「スイスがあるじゃないか」

「いいか、もし他国が戦争を仕掛けてきたら一体、どうするつもりだ？ 日本は戦争禁止だから戦いませんって、指くわえて殺されるのかい？ 能天気にも程がある」

「実際、呼称の問題は別として、日本は既に自衛隊があるんだからなあ……」

「でも、憲法を読む限り、例えどんな状況でも戦争はダメとして思うけど」

敗戦から四十年近くを経ようとしている頃で、未だ集团的自衛権などという概念はなかった。自衛隊は違憲か否か、概ねそんな会話がなされていたと思う。

大学一年の夏休み、実家に帰省する前に久々に祖父の所に寄った。

祖父は心尽くしの歓待をしようと待っていた。私を見る祖父の目には限らない優しさがたたえられていた。

「久しぶりじゃな、マー坊。あつ、れっきとした大学生にマー坊はないか」

「いいよ、ボクだって、Gちゃんだし」

東京の生活、大学の勉強、その頃身体の不調を訴えていた母の近況などを報告がてら語るうちに、「汗かいたじゃろ、ひとつ風呂浴びておいで」と、私が来る頃合いを見計らって湧かせてくれた薪風呂は、普段入浴する銭湯のとげとげしい熱さと違って、湯は柔らかく、身体の内からほここと温めてくれるのだった。

湯から上がると、囲炉裏には牡丹鍋の用意が整えられていた。久々に見る、大皿に盛られた猪肉の赤とネギなどの野菜の緑が美しく、食欲をそそった。

「うちで珍しいもんなら、これしかないんじゃ。マー坊が

来てくれるゆうんで、撃った猪、冷凍しとった。まあ、暑いときに熱いもん食うのが一番の避暑法」

「酒も呑むんじやろ。焼酎しかないが氷入れて飲ろう」と、皺だらけのシミの浮きでた手で氷をつかむとグラスにガチャガチャと入れた。一升瓶を持ち、どのくらい？と焼酎を注ぎながら「孫と呑める日が来たか」と満面の笑みを浮かべるのだった。

鍋の肉をさかになに酒が進んだ。

「マー坊は、彼女、できたか」

照れ隠しに首を振るしかなかった。田舎の男子高校出身なので、都会の華やかな女子大生とはどう話していいかわからず、性欲を持て余しては下宿で悶々とする日々だった。

「Gちゃんは、ボクくらいとき、もういたの？」

「ハッハッハ、ワシの青春なんか真つ黒じゃ」

「まっくら……」

「戦争。中国の広い、広い、荒野を、重い荷を馬にひかせてゆく輜重兵^{しじゆうへい}だった。一日十里も行軍するが、ぬかるみにはまると動かなくて……馬も何匹も犠牲にした」

「中国の、どの辺り？」

「湖南省の衡陽というところから桂林に進んだ。桂林、知つとるか？ よく南画^{なんが}で険しい山々が描かれるとじやろ、あそこだ。毎日、行軍でクタクタな上に徴発^{ていぱつ}といって食料

だけじゃなく……」

祖父は、はるか遠いところを眺めるような、そのくせ妙に冷酷な目の光を帯びて言った。

「女も徴発した。もちろん戦時強姦は軍法会議にかけられる重罰だった。だがな、戦争が長引き、一人、また一人と命を落としてゆく戦友たちを見せつけられ、死ぬか不具にならんきや日本には帰れんと思ひ定めるほかなくなつて。上官たちでさえ、おい、そろそろ女も徴発してこい、と命じたもんじゃ。どうせ敵国の女、殺しても何しても敵の力を削ぐことになるつて」

「そんな都合よく見つからんよ。探すときに限って野犬一匹見つからん。付近の百姓家から強奪する」

「じ、Gちゃんも……」

「ああ、やつた。マー坊も男だからわかるじやろ、いい女を見つけて、しかも犯したつて誰も責めないというなら、どうする？」

「迷惑なんてもんじゃない……ワシらは、いつ死ぬかもわからぬ毎日で身も心もぼろぼろじやつた。投げやりな、どうしようもない憤怒と怨念が時に暴発した」

「そこまで語ると、おお、忘れとつたと、蚊取り線香に火をつけようとマッチをすつた。」

標高の高い家には林からの夜風が吹き抜けてマッチの炎が揺らいだ。

祖父の横顔は妙に厳しく見えた。

「芋でも高粱^{こりやん}でも、食えるもんは何でも頭陀袋に突っ込んで奪った。農民たちは震えているか、逃げ出したもんじゃ。こっちは銃を持つとるからな。リーベンダイツつて叫ぶ者もいた。日本鬼子つて意味じゃ。そして時にや、食いもん

下宿での毎日が思われ、うなずくしかなかった。

「これ、見てみい」祖父は両手の小指を並べて見せた。右手の小指は半分ほどしかない。

「確か、敵の弾が当たつて」

「ふん、それはマー坊がまだ幼かったから、そう言つたんじゃ……本当の所は……まだ若い娘じやつた。のしかかり着ているもんをはぎ取ろうとした。アイアサイサン、アイアサイサンつて叫んで必死に抵抗した。中国語のわかる兵に聞いたら『哀哉先生』つて勘弁してつて意味じゃそうだ。

受賞の言葉

渡辺 勝

冬空に蕭条と立ち上る一筋の紫煙。

我が家の前の林檎畑。時々、剪定した枝葉が焚かれると懐かしい香りが漂い、愛犬との散歩の途中について、手をかざします。

ほこほこと温かく、近づけば身体の芯までくる熱量で寒さを溶かします。焼かれています木も、燃やす炎も何かを訴え、表現しているかのようです。

限られたこの地上の生の時間内に、私も何かを訴え、表現したい。例えば、すぐに忘れ去られるちいさな火でも……誰かを暖めて。



御注文はアジア文化社まで

詩の添削指導

詩人集団 J

第一線詩人による懇切な添削指導

文芸思潮編集部や第一線詩人が、あなたの詩を読み、丁寧に指導します。あなたの詩作力、Poemに込める言葉の力、表現力がパワーアップされます。

面談も可能。詩の方向、創作のヒントもアドバイスしてくれます。

あなたの詩を詩人集団Jにお送り下さい。

連続しての指導もあります。

1編（A4／2枚以内）4000円

2篇（A4／5枚以内）7000円

※力がアップし優秀な作品は文芸思潮に掲載します。

お問合せ・お申込み・詩の送付は右の事務局へどうぞ

詩人集団 J 事務局

〒158-0083 東京都世田谷区

奥沢7-15-13

アジア文化社内

TEL03-5706-7847

あんまりうるさいから横面を張り飛ばし、口に手を当てたら小指にかみつきました。離せと、何発も張り飛ばしたが、憎しみに満ちた目でワシの右小指に噛り付いて……殴るうち、女は気を失ったようじゃった。ワシの小指は半分千切れたようになって血がドロドロ止まらんじゃった。犯すどころじゃなく、持ってたばろ布できつく縛って急ぎ帰隊し、軍医に縫ってもらったが、化膿して、切り落とすことになった」

「そこまで語り、祖父は第二関節で丸くなっている右手の小指をしげしげ眺め、「戦後、よくヤクザの指詰め間違われたもんじゃ」とつぶやいた。

「仲間内にああ、今日は女、二人犯したとか、あんまり抵抗するから腹、裂いてやったなんぞ自慢気に話す者もいた……まったく酷えことしたもんじゃ。人間同士が殺し合う戦争になりや、普段洒落こいてる者が鬼にも悪魔にもなるんだ。そうなりや法なんて、どんな立派な法だって、何の意味も効力もありやしない」

その夜はあまりに衝撃的な話に寝付かれず、布団の上で反転し続けた。

あのやさしいGちゃんが。

自分と年齢が変わらぬ頃の、若い祖父の姿。

犯行に及んだ情景。

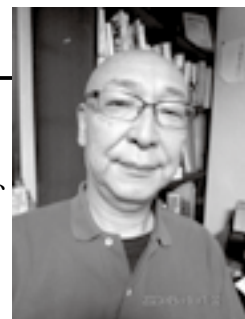
血が滴る小指。

渡辺 勝

わたなべ まさる

早稲田大学教育学部卒
大学受験予備校や県立、私立高校で英語を教える四年ほど前の還暦前後から本格的に公募文学賞に応募開始

受賞歴は第25回随筆春秋賞佳作、第16回文芸思潮エッセイ賞奨励賞、第37回日産童話と絵本のグランプリ佳作、第31回小泉八雲顕彰文芸コンクール奨励賞、第31回岐阜県文芸祭一般の部随筆部門文芸大賞、漱石チャレンジングアワード準グランプリ、一般社団法人日本勤労青少年団体協議会主催「働くってなんだろうエッセイ2023」特選（厚生労働大臣賞）、等々



そこには学生の青臭い議論など及びもつかぬ重く血なまぐさい事実があった。

とうとう朝方まで寝られず、朝陽が林に照りつける頃、うとうとしただけだった。

祖父は、私が大学三年の秋に脳溢血で倒れ、帰らぬ人となった。

だから、Gちゃんと酒を呑めたのは後にも先にも、一回きりであった。

北緯5度の島の原爆人形劇

高田ひとみ

ボデイが少しへこんだマイクロバスが街の渋滞を通り抜け、時には山々が連なる高地を走り、時には蒸し暑いジャングルを走っていく。山に行けば少しずつひんやりしスツールやカーディガンをはおる。ジャングルに行けば空気がまとわりつき、髪の毛がおでこに張り付く。

約二年スリランカにいた。十年以上前の話だ。青年海外協力隊員として女子更生施設で活動していた私は、毎日が施設内での活動で、入所者も職員もほとんど女性ばかり、日ごろの痴話げんかや愚痴などに辟易することもあり、休日にボランティア隊員が行なう自主活動のサークルに入ることになった。よさこいソーラン節やゴミ拾い、合唱の活動などもあったが、選んだのは原爆展サークルという、広島長崎の原爆投下について各ボランティアの活動先で正しい知識を得てもらおうサークルだった。

字が読めない人もいることを考え、基本は映像と、人形劇。最後に全員で折り鶴を折るという活動だった。題材は、原爆症で亡くなった佐々木禎子さんの生涯であった。

青年海外協力隊の任期は二年である。当時は、三か月に一度新隊員がやって来て、先輩隊員が去っていく。メンバーの入れ替わりも速い。スリランカに来て三か月後には、すでに人形を操作しながら現地語で演じることになっていた。初めての人形劇。初めての現地語。手を思いっきり伸ばし、人形を大きく動かすたびに汗が流れ落ちる。また人形を動かすことに気を取られ、現地語をうまく話せない。うまく話せたとしても感情が入っていないく、お母さんが原爆で爆死したシーンで「おかあちゃん！」と泣き叫ぶところで先輩隊員からダメ出しが出される。土日に全体練習をした後は、家に帰っても発音の練習をしないと間に合わない。しかし、普段一人で更生施設の中でもやややしながら過ごしていた私には、ダメ出しさえも楽しく思われ、本当に現地語で活動しているという実感があつた。何より、様々な専門性をもつ隊員が知恵を出し合い、問題を解決していくことの快感と達成感。わたしはこの感覚にはまってしまったのだ。このサークルで他の隊員たちの活動先を訪問でき、生

活に大して困らないコロンボ近郊に住んでいた私が、電気や水道がなかなか通っていない地域をみることでできたのも収穫だった。

当時は、メールで連絡を取り合い、そこで練習の日程やアイデアを出すことが多かった。充分な事前練習はできず、当日のリハーサルにけることがほとんどだった。練習がうまくいかないときは、早々に切り上げて懇親会と化し、活動の悩み相談や現地の生活には慣れても日本への帰国へのあこがれを披露する機会になった。またある時は、飲み

すぎて打ち合わせにならないときもあったり、開催地で折った大量の折り鶴を千羽鶴にして広島に送るために総出で針と糸でつなげたりもした。

そして自分の本来の活動に悩みながら過ごした一年後、前リーダーの推薦で私はそのサークルのリーダーとなった。この二年間で十か所以上、人形劇をおこなったが、同じ内容をおこなってもまったく同じ雰囲気にならないのがとても興味深かった。忘れられない開催地が、自分たちが話す現地語であるシンハラ語が通じない地域での人形劇だ。

山岳地帯にある紅茶のプランテーション。首都とは違い、涼しいくらいの気候である。会場は保育所。その保育士さんが別の言語であるタミル語を話し、人形操作を協力隊員がおこなった。この地域は、昔、植民地時代にインドから連れてこられたタミル人の子孫が住んでおり、スリランカの中でも貧しい土地である。シンハラ人とは顔立ちも宗教も生活習慣も違うため、別の国に来たような感覚になる。おそらく、一生をこの地域で終える人がほとんどである。そのため、見慣れない日本人が来て、人形劇を行なうということは一大イベントであり、こどもも大人も一躍のシャツで



やってきていた。

まずは、到着したらすぐに背景を映すスクリーンやプロジェクターなどの機材を選び、さっそくタミル語を話す保育士さんのセリフと人形の動きを合わせる。二〇代前半の保育士さんが事前に練習をしてきて、「自分はこの役！」と一斉にアピールし、熱心に日本人と動きを合わせる。観客席では、早く来た人々が興味津々に練習を見ている。その後本番も合わせて、何度も見ることになるのだが、飽きることはないらしい。人形劇が終わると、平和を願って全員で折り鶴を折る。日本人にとってはなじみの深い折り紙を外国で、教えるのはとても難しいものだと痛感させられる。平面の紙を折って、立体の動物になることが不思議らしい。しかし、おそらくはじめての折り鶴を折ると全員笑顔で折った鶴を見せてくれる。それだけでもやった甲斐があり、その笑顔に癒されたものだ。

もう一つ忘れられない開催地が、リーダーとしての最後の人形劇で、スリランカ南部のアハングマ。アハングマは、約二〇年前インドネシアで地震が起こった時に、津波に襲われ、大多数の人が亡くなった場所である。その当時、「津波」という災害を知らなかったスリランカの人々は、波打ち際まで見に行き流されて亡くなったという。そんな悲劇が起こった場所に職業訓練校が建てられ、津波を知らないホテル業を学ぶ若者が日本人を緊張してもてなしてくれた。

この回、多くの協力隊員が参加してくれたことに気が抜けたのか、全員での持ち物の確認を忘れ、人形劇に使う人形や背景の絵を忘れてしまった。しかし、様々な職種の専門家がいたため、人形は別の人形で代用し、背景はパソコンインストラクター隊員がスクリーンに映し出すという工夫してくれた。折り鶴の折り方は、服飾でパターンメイキングが専門職の隊員が、大きな折り紙を作り、折り方がわかるようにしてくれた。忘れ物はしてしまったものの、工夫で乗り切れたことは協力隊員の底力を見た思いだった。この原爆をテーマにした人形劇はいつから始まったのか。スリランカでは、広島出身の協力隊員が始めたのがきっかけだ。「ヒロシマ」「ナガサキ」「アトミックボム(原爆)」という言葉は知っていても、今でも広島、長崎は焼け野原だと思われていることもあるらしい。原爆の恐ろしさ、戦争の愚かさ、平和への願いを伝える活動が今でも協力隊員が派遣されている国々でおこなわれている。

戦争について考えると、テーマが重すぎて個人ではまったく考えていない日本人が多いかもしれない。しかし重いテーマでも、人形劇をチームで行なうことで、演じるという達成感もあいまって、自然と戦争について考える自分も発見できた。いや、正しくは戦争と日本人がどう関わってきたかを考えるようになったのである。今のウクライナとロシアのように、自分たちも実は何らかの形で戦争に加担

北緯5度の島の原爆人形劇

しているのではないのか？ 原爆を作った人々は製造する時、「ヒロシマ」「ナガサキ」の状態を想像できたのだろうか。四年前、コロンボで連続爆破事件が起きた。時々お茶をしていた場所がテロの攻撃になるとは思ってもいなかった。スリランカで出会った人々の顔が次々と浮かんだ。今は経済危機でインフレに苦しんでいる国スリランカ。部屋を貸してくれた年金生活者の大家さんは生活できていないだろうか。人形劇を見に来てくれた紅茶畑で働いてい

るタミル人は元気だろうか。

一度しか会ったことがなくても、本当の友人のように心配する自分がある。

停電や断水で困っているも日本人、シンハラ人、タミル人関係なく、人形劇をみんなで協力して開催できるよう、笑顔で楽しむことができた。国同士の争いになると、なぜかそれができなくなってしまう。

自分にできることは何か？ 日々考えている。



高田ひとみ

たかだ ひとみ
1974 北海道生まれ
中学校教員を11年勤務
2011 青年海外協力隊員としてスリランカに派遣
現在は、スリランカでの経験を活かし障がい者支援に携わる

受賞の言葉

高田ひとみ

スリランカから帰国して十年を機に、記録に残せなかったことを文字にしておこうと書いた文章で、今回の賞をいただき、ありがたく光栄に思います。

当時の日記や画像を見返していく中で、つらいこと悔しいこともあったはずですが、多くの人と出会い、関わった楽しさばかりがなぜか思い出されました。密度の濃い二年間でした。

賞をいただいたのは中学生の時以来でしたが、文章を書く楽しさを改めて感じました。

今回の受賞を励みにこれからも楽しみながら文章を書き続けたいです。本当にありがとうございました。



闘病に感謝

金子亜実

今でこそ離婚して片親に育てられることは当たり前になりましたが、私が五才だった昭和五十六年は、まだ離婚家庭はほとんどありませんでした。それだけに、離婚して引越しすることを聞いた保育園の先生が、私を強く抱きしめながら号泣してくれました。友達からも「母親一人なんだ……」と、言われることもありました。母一人子一人の生活は、五才の私には突然の変化で気持ちが追いつきませんでした。だんだんとその苦しみや孤独に襲われるようになっていきました。

両親の離婚後、祖母の家で夕飯を食べるようになり、夜八時頃に母がお迎えに来るという生活になりました。ところが、当時はバブル全盛期だったこともあり、三十才で遊びたい盛りだった母は、外で飲むことが多くなっていました。その度に私は祖母の家に泊まることになり、祖母が電話の受話器を置いて「今日もお泊まりだよ」と言うと、絶望的な気持ちになり、トイレで静かに一人で泣くようになりました。なぜか泣いてはいけない、泣くところを見せたくないと思っていた私は、トイレで声を殺して泣く

ようになりました。そして、なんでもなかったかのようにトイレから出て、寝る支度をするのです。

お泊まりすることが当たり前のように繰り返される日々でしたが、祖母の家に私の歯ブラシが用意されることはありませんでした。祖母の家には従兄弟が暮らしていたので、祖母から「その歯ブラシを借りてちょうだいね」と言われ、嫌だなど思いつつも、その歯ブラシを使いました。まるで私の存在なんてどうでもいいと言われているような気がしていたけれど、歯ブラシを買って欲しいと言うことができませんでした。歯ブラシを買ったら、二度と家に帰れなくなってしまうから……。

そんなある日、叔父が「おまえは子どものことをどう思っているんだ。こんなに頻繁に泊まらせているなら、もう俺が子どもを引き取って暮らしてもいいと思ってる。これでは子どもがあまりにもかわいそうだ」とテーブルをバンッと叩きながら、興奮して言いました。私は驚きつつも、母は私を捨てるかもしれないと不安になり、この家で暮らすことになったらどうしよう……と、心臓の音が外に漏れ

そうなくらいバクバクしていました。すると母は「冗談じゃないわよ、私が育てるわよ」と反論し、心底ホッとした私……。

しかし、中学生になると、母に彼氏ができ、私はさらに不安と孤独に襲われるようになりました。思春期だった私は、酔った母を目にするのも、酔った状態で男性といる姿を見ることが汚らしく思え、嫌でたまりませんでした。

とはいえ、現実には思うようにいかないもので、部活から帰ると玄関に大きな靴があることが増えていきました。その靴を見る度に、クタクタに疲れていても帰る気がせず、近所を歩いて時間を潰すようになりました。もう帰ったかどうか？ と、玄関を覗いてみると、まだ靴がありました。外は暗くなってきたので、私は諦めて、元氣よく「ただいま」と家に入りました。すると、「おかえり」と、母の彼氏が満面の笑みで食卓でお酒を飲みながら、私を見つめたのです。愛想笑いをするのもできず、ムスツとした顔で挨拶する私。その男をなかなか受け入れることができませんでした。私立高校を受験することになったので「お金も必要だし、あなたの部屋も作ってくれるから」という条件で、その男と三人で同居することが決まってしまったのです。お風呂もないボロ家での生活から、お風呂付きの広いマンションに引越すことになって、喜んだものの、その喜びは長く続きませんでした。

その男はとても神経質で、私の靴の脱ぎ方やトイレットペーパーの切り方など、躰しづがなっていないと母に怒鳴るようになりしました。さらに、掃除も出来ていない、高校生なら食事くらい作るようにと、アレコレ言われるようになり、お金があっても幸せじゃないんだ……と、心の底から思っていたものでした。やがて、母と男の喧嘩が絶えなくなり、しまいには母が私に相談に来るといって、地獄の日々に……。その彼との生活は約二年ほどで破綻し、またボロいアパートへと引っ越すことになりました。願っていた母と二人の生活は幸せでしたが、ある日、どん底に突き落とされる出来事が起きました。

それは、友人と旅行に行ってくると言って出かけた母をベランダから見送っていたときのこと。母の隣にはあの男がいたのです。別れたと思っていた二人が、実は私には内緒で関係が続いていたのです。母に裏切られた……。私は母を憎むようになりました。自分の存在価値も感じられなまま大人になりましたが、就職をして、やっと自分の人生を謳歌できるようになりました。それなのに……。

今度は母がストレスから重度のうつ病を発症。付き合っていた男は母から離れていきました。すると母は、私に助けを求めてきました。今までのことを思うと怒りがこみあげてきました。なぜこんなにも母親に苦しめられる人生なのかと、不満が蓄積し、やり場のない怒りの感情を抑えき

れず、逃げ出したりしました。病院からは薬を十錠も渡され、きちんと飲ませるようにと言われたものの、薬を飲みたくなないと拒否する母。私が出かけようとするベランダに立ち、死のうとする母。「私を殺して」と真顔で私に訴えてくる母。もう私の精神は限界でしたが、就職したばかりの会社を辞め、アルバイトをしながら母の看病をする。ことに。アルバイト帰りの街中ですれ違う同世代の楽しそうな子達を見る度に、泣きそうになりました。家に帰らないう。帰れば死にそうなる母が待っているだけ……。このままどこかへ逃げ出せたらどんなに楽か。グルグル頭の中で様々な思いが駆け巡り、家路に向かう途中で、中学時代の親友のお母さんにバツタリ会いました。苦しかった私が事情を話すと、親友のお母さんはキッパリこう言いました。「あなたが本気で母さんの幸せを思えるようになったとき、お母さんの病気は治るわよ」と。

医者でもないのに、どこからその確信がくるのかわかりませんでした。薬にもするが思いで「私が変われば母の病気が治るんだ」と自分に言い聞かせ、アルバイトをしながら母の看病に徹しました。早く治って、また笑顔の母になって欲しい……。すると、私の母に対する言動や振る舞いが変わったせいか、薄紙を剥ぐように薬が減り、約一年ほどで社会復帰を果たせるまでに回復したのです。このとき、うつ病というものを学び、家族の辛さや大変さ、患者

への声のかけ方など、多くのことを学びました。いつしか母に対する憎しみも薄れ、母が回復することだけを考える様になっていました。

ようやく母が完全に回復したので、私は自分のやりたかった仕事に挑戦し、就職を勝ち取りました。ところが、ハードな仕事なうえに、私生活での悩みも重なり、今度は私がパニック障害とうつ病を発症。仕事を辞め、寝たきりになってしまったのです。ただ呼吸をしているだけの人間。なんのために生きているのかわからなくなり、自殺未遂もしました。母を泣かせる言葉を何度も吐きました。それでも母は、「私が看病してもらったように、あなたに恩返しをする」と言って、働きながら必死になって看病してくれました。考えてみれば、それほど長く母と一緒に過ごした経験は初めてのことでした。病気になったことで、私の心の中に空いていた大きな穴が、少しずつ愛で埋まっていく感覚を抱くようになりました。くしくも病気になったことで、ようやく母の愛を感じることができたのです。なんとこの皮肉でしょう。病気で苦しいけれど、母が側にいてくれること、母の愛情を感じられることで癒やされていく自分がいました。それでも、うつ病というものは怖いもので、無意識にもすごい力で死へと引つ張られる感覚に襲われることが何度もありました。自分の気持ちをコントロール出来ない辛さ、見えないトンネルの暗さ……これほどまで

に、うつ病は苦しいものなのか……母も同じように苦しめたのか……。スーツを着ているサラリーマンを見るだけで、自分は働けない無価値な存在だと責められている気がして、涙が流れてきました。いつか自分もまた、働けるようになるとは、全く想像ができませんでした。

投薬だけでは良くなかったため、医師にカウンセリングを進められ、過去を振り返りながら自分を受け入れ、愛する作業を行っていました。やがて少しずつ意欲が出てくるようになっていきました。

カウンセリングの力はとても大きいものでしたが、それよりも、初めて本当の親子になったことに大きな意味を感じました。支え合うことで、埋まった穴。一緒に過ごすことで感情をぶつけ合えたこと。初めて親の愛情を感じることでできたこと。病気は苦しいものでしたが、私たち親子にとっては、本当の親子になるために必要なものだったのです。そしてこの病気を通し、心から母を許し、愛せるようになったのです。

闘病は、誰でも避けたいものであり、苦しいものですが、闘病でしか得られないこと、学びがあることを知りました。そして、同じ病の人に心の底から共鳴することができます。今、心の病で苦しむ人が増えています。支える家族の心労は言葉では表せません。でも希望を見失わないでほしい。こんな私達親子でも、乗り越えることができたのですから。

今起きていることには、きっと何か意味がある。今私達親子は、このように過去を振り返ることができるまでになりました。病よ、ありがとう。何よりも強く深い親子にしてくれて。私は今、母と仲良く生きていきます。



金子亜実

かねこ あみ
勤務した後、フリーライターに。食が心と体を作ることを痛感し、子育てをしながら食育インストラクターの資格を取得。その後、食にまつわる記事の執筆や電子書籍を出版。

受賞の言葉

金子亜実

誰もが人生において辛い時期があるものです。トンネルの渦中では光が見えず、立ち止まってしまうこともあるでしょう。けれども、諦めず1ミリでも前に進むことで、わずかも光が見えてくるものです。辛かった出来事を、このような形で人に読んでもらえることになりましたが、ほんの少しでも誰かの心の灯火になったとしたら、これ以上の喜びはございません。その機会を与えてくださったことに心より感謝いたします。

わたしが統一教会に通っていた頃

山田まさ子

わたしが統一教会の門をくぐったのは、特別な理由があるわけではなかった。色白の女性が寒い日に薄いカーデイガンを羽織ったままで話しかけてきて、寒そうな肩を見て、話だけでも聞いてみようと思ったからだ。だが、そのことを書く前に二〇二二年に起こったあの日の事について触れておかねばならない。

今、手元にある京都新聞号外には、二〇二二年七月八日付黒ベタ枠に白ヌキ文字で「安倍元首相銃撃される」とあり、小見出しには、「心肺停止か、銃撃で」「奈良で演説中、容疑41歳男逮捕」とある。

この日、わたしは銃撃直後の現場に駆けつけた。友人と一緒に京都へ遊びに行くつもりであったが電車の中で、スマホに速報が入り、安倍元首相が銃撃されたという。奈良市の近鉄大和西大寺駅前と聞いて友人は渋った。今乗っている京都市の電車とは全く違うから乗り換えが大変だと

言う。わたしはここで殺し文句を言った。「今起こっているこの事件は歴史に残るような大変なこと。だから現場を見ておかねば」

友人は老いてはいたが元新聞記者であり、現場を見なければという本能が残存しており、歴史的などという言葉にも弱かった。

「せやなあ、これは今じゃないと見られへん」

我々は二つの駅を乗り換えて事件発生から二時間後には近鉄大和西大寺駅前にいた。列車は降りる人でごったがえしていた。駅は二階建てで上階はガラス窓になっていて、下の選挙演説があった場所を見下ろすことができる。まだ首相の生死はわからなかったが、記事に慣れた友人は心肺停止と発表されたらもうおしまいやという。二階のガラス窓から覗いているお年寄り連中は物見高く、一人が得意げにスマホを翳^{かざ}して見せた。「これに速報が入ったからわたしはすぐに駆けつけたんや」「俺はテレビを見てきた」三人

目も興奮した顔つきで、何かしら面白いショーのように現場を眺めては語り合うのだった。

駅の周りも見物人が押し寄せていた。選挙カーのあった辺りまで近づくと青いビニールが一面に敷かれていて、捜査員たちが屈み込み、何かを探していた。銃弾を探してい

たということだ。人々は黄色いテープギリギリまで囲んでいて、スマホで写真を撮っている。テレビ局がマイクを向けたりもしていた。買い物婦りの奥さんが何があつたんですかと聞いてきたので、説明するとへーといったきり、びっくりにしたような顔をしている。後に首相が亡くなってか



事件現場写真は筆者撮影

ら、沈痛な面持ちの人たちがやってきて雰囲気重苦しくなるのだが、このときはまだ人々がただもの珍しげにそして何が何だかわからないといった面持ちで眺めていた。

どこかの選挙演説で事件の見解が聞けるかもしれないと再度京都に向かった。地下鉄駅構内では「ごーがい、ごーがい」と叫ぶ声が出て、京都新聞号外を人々が取っていく。駅内でもコンビニでも道端でも熱心に立ったまま紙面を覗き込んでいる。こんなふうになが新聞を覗き込んでいる姿はいつの時代に見ただろう。選挙カーは一台もいなかった。天王寺で辻元清美の演説ならやっているかもしれないと大阪に戻って見た。だが自民党以外も選挙演説を中止していた。諸派の選挙カーはマイクを握っていた。押越清悦という人物が大声で、この度の首相元首相の銃撃はテロであり、背後に中国の影があると演説をしていた。数人ほどが熱心に聞いていた。デマや憶測は乱れ飛んでいた。いつだったかカフェでおばちゃんたちが、犯人はプロの狙撃手が別にいる、銃撃の弾が消えたのがその証拠などと訳知り顔で話をしていた。

山上徹也被告は、二〇二三年一月に起訴された。動機は母親が旧統一教会に多額の献金をしていたため、教会と近い関係にある安倍元首相を狙ったという。元首相が父親の秘書をしていた時代に山口で話をしている人が、阿倍さん

は気さくな人物だったと振り返っていた。とても出世するようには見えなかったそうだ。もちろん政治の頂点に出世しなければ、安倍元首相は無事でいられた。だが相手が代わるだけだ。若い頃にわたしは選挙カーのウグイス嬢をしていたので、統一教会の人が手伝いに来ているのを日常としてみまわっていた。お札の飛び交う金権選挙をみてきた者としては、突如沸き起こった安倍批判も、自分たちは関わりないと主張する自民党議員も、なにを今さらという思いであつた。

二十三歳くらいのとき、統一教会に通い始めた。ここですぐ上で指導してくれる人のことを「姉妹」と呼ぶのだが、この呼び名も一人っ子で元鍵っ子には夢のようだった。被差別出身や母が精神病院にいたことを隠さねばならなかった身には憧れた物語の中にいるようで嬉しかった。赤い背広の似合う父は「色男金と力は」と自ら囁くようなノーテンキであり、ギャンブルの借金のせいで引越せねばならず、親身になって話をきいてくれる姉さんが出来たことは僥倖であつた。

統一教会の講義は大変興味深いものだった。というのも、わたしは中学時代にエホバの証人に通っていた。毎週日曜日昼ご飯に配給してくれるカレーがめあてだった。アルミ鍋に入れられたカレーは薄い汁だったが、それでもホーム

レスは講義を聞きさえすれば、カレーが食べられるのだからとありがたがっていた。

エホバの証人の教えと、統一教会の教えでは、同じ聖書が下敷きになっているとは思えないほど違っていた。統一教会のものはアダムとイブの話の解釈からして全く違っていて斬新に思えた。新しい知識に触れて、わたしは興奮したのだが、一方で姉妹のような純真な信仰心は持っていなかった。

姉妹は初めてわたしがここに来た時に、ピアノを弾いてくれた。讃美歌を知っているなら、どれでも弾くよと言うので、わたしは「主の民と喜べ、みくに近し シオンにキリストたちみな喜ぶ」と歌い始めた。すると彼女は全身で笑い出した。これはよその教会の讃美歌だよ、これしかまだ知らないと言えらる、じゃあそれ歌ってしまおうかと言ってそのまま弾いてくれた。彼女はまた洗脳されきっているわけではないと思った。筋金入りの信者なら他宗派の讃美歌は「悪魔の歌」になる。エホバの証人でも他宗教の者は最後の日に地獄に堕ちると教えられた。統一教会でも彼女の指導者にあたる男性の指導者はそう言っていた。

だが統一教会といえども四十数年前は人によって違うこともあつた。東京から来たさらに上の階級にいる人は、講演会で他宗教を罵ったりしなかった。他の神仏を祈っていても正しきものは真実の神につながるのだと教えた。聖書

からの引用だろう。その時にやはり上層部になるとあからさまによその宗教の悪口は言わないなと感じたから覚えていた。後にわたしが真言宗の信者になったときに聞かされた仏の講話も、そのまま出典を伏せたまま使われていた。我が姉妹は要領が悪いために全く出世とは程遠かった。干物だとか雑巾だとかを売ることが出来ない。よその姉妹は高価な花瓶や印鑑を売り、指導者の覚えめでたかったが、彼女はその辺はでんでダメだった。わたしに何かを売ろうとしたこともなく、他の信者が献金を言いかけると「この人は無理だから」と止めていた。

濃紺のスカートに首元までとめた白いペラペラのブラウス、髪飾りひとつない彼女には、わたしには青春がないように思えた。脱会出来て、姉妹と二人町にアイスクリームを食べに行けたらどんなにいいだろう。この統一教会にずっといて大丈夫かと聞くと、何か雑誌で読んだのですかとひどく悲しげに聞き返した。彼女を傷つけたくなかったので、もうその話は口にはしなかった。週刊誌で合同結婚式が話題となっていた頃だった。結婚は決められた人とするのだと答えていた。まだ二十五歳にもなっていない。うら若い彼女はあまりにもおとなしく儂げに見えた。どうしてここに入ってきたのかと尋ねると、松山に住んでいた頃に失恋したのだと答えた。相手の男性を責めもせず、家には自分の居場所がないと言う。

だがここは居場所だったろうか。彼女の指導者はひどく芝居がかった男で、わたしが久しぶりに訪れると、あそこであなただけの姉妹が祈っていると指差す。その先には彼女が素足で床に跪いて祈っている姿があった「あなたがあんまり来ないので、姉妹は悲しんで自分を責め、毎日祈っているのです」

「この方が来ないのは姉妹の導きが足りないせい」と大声で叱りつけることもあった。

一年後彼女は、転勤となった。わたしは船着き場に見送りに行き、小さな七宝焼きのペンダントをプレゼントした。飾り物はつけてはいけない規則になっていたけれど、若い女の人の一つくらいいいだろうと思った。別の姉妹がジトツとした眼でペンダントを睨んでいた。でも姉妹は教義のいう虚飾品ではなく、わたしの気持ちとしてとらえていた。よその教会の讃美歌をこっそり弾いてくれたときと同じ、やさしい笑顔を浮かべた、小さな街灯りの絵のついたペンダントを大事そうに手に握り締めていてくれた。姉妹からわたしに贈られたのは一枚の手作りのしおりで、聖書の一節が細かい文字で書かれていた。

紙テープ一つない船での見送りだった。大阪から韓国へ行くので、もう会えないとわかっていった。当時脱会を勧めなかったのは、あれほど純粋な人が普通の世間で生きていけるとは思えなかったからだ。まるでアンドレ・ジイドの

「狭き門」に出てくるアリサだった。このまま教会の中で守って貰って生きて行けたらと思ったのだ。

けれども、この見通しは間違っていたのかもしれない。その後わたしは民生委員として千葉の松戸で三年間過ごしたが、信心によって一文無しになって流れてきた人たちをみることがあった。こんなところに来るような人じゃないのにと役所の人がつぶやくような人もいた。心を病んだり、認知症になったりして宗教団体にお金を持っていかれて、老朽化団地に流れてきている人たちであった。こんなことは統一教会だけではなかった。

教会に裏切られたら、姉妹は生きていけない。一心に神を信じていた。内部の虐めすら、あの人にとっては神の試験だった。教義を伝えてくれた夜、わたしは暗い夜空の寒々とした欠けた月を見上げた。神の教え、あの方はそれが正しいと思う、わたしに伝えてくれた。姉妹が出来た喜び、一人でないという何かに抱かれているような安心感、他人からは統一教会に通っていた頃は、不毛でも無意味な時間に見える。だがわたしにとっては、不毛でも無意味でもなかった。友達が差し出してくれた温もりだった。

号外を握り締めたまま、わたしは思った。あの人はこのニュースをどう思うだろう。以前のようにでたらめが書かれていてと思うと聞かないふりをするだろうか。あの純粋さが傷つけられていないだろうか。



山田まさ子

やまだ まさこ
1957年生まれ、土佐育ち

1994法政大学通信教育部卒

大阪文学学校修了生

高知県芸術祭文芸賞

大原富枝文学賞

第6回法政大学懸賞論文賞『法政』1994年2月号掲載

第12回JTB旅行記賞佳作『旅』2004年1月号掲載



受賞の言葉

山田まさ子

作中の姉妹、この作品はあなたへの届くことのないお手紙です。韓国でも日本でもどうかお元気でありますように。掲載には感謝の気持ちでいっぱいです。いつもわたしの作品を良いね、良いねと何十年も、94歳の今日も褒め続けて下さる田中卓之先生、先生のリップサービスにどれだけ励まされたことでしょう。

選んで下さった審査員の先生方、編集部の皆様、誠にありがとうございます。恩師田中老譲りの文学雀の踊りで頑張ります。



1700円

御注文はアジア文化社まで



御注文はアジア文化社まで

カダフィーの国のヌエジ

竹中水前



私の部屋の壁に、額に入った一枚の写真が飾ってある。四十七年前の私が二十九歳の時のもので、男の子を肩車している。

撮影地は北アフリカのリビアの第二の都市ベンガジ。男の子は五歳、名前はムスターファという。当時の現地でのブリヂストン代理店社長ヌエジ氏の四男坊である。目がくりつとして非常にかわいかった。

私は彼を肩車しながらよく歌ったものだ。

♪ ヤ ムスターファ ヤ ムスターファ アナバヘバツク ヤ ムスターファ

「ムスターファよ、僕は君を愛しているよ」という歌だが、彼はこれを聞くといつもキャッキヤツと笑って私の肩の上でお尻を跳ねた。

カダフィー大佐（リビアではカダフィーとも発音する）を首長とするリビアの国土面積は日本の四・七倍だが、そ

のほとんどが砂漠だ。この砂漠の中に、国の、いやカダフィーの財宝ともいべき原油が豊富に埋蔵されている。

砂漠の中の石油基地への物資運搬は道なき道を走らなければならぬが、地形的にも気候的にもタイヤにとっては非常に苛酷であり、この条件に適応するのは至難の業である。ブリヂストンはこの苛酷な市場に一九七三年から参入し、試行錯誤を繰り返していた。

一九七六年夏、私はベンガジのヌエジ社を訪れた。三回目となる。市場で弊社の砂漠用タイヤがどう活動し、どう寿命が尽きたかを確認し、さらなる改良が必要かどうかを見極めるのが私の使命である。

社長のヌエジ氏はいつものように店の前にでっぷりとした身体を椅子代わりの段ボール箱の上に乗せ、イスラムのタスビーフ数珠を一つ一つつまんで移動させていた。その目は前の通りをじっと見つめていたが、焦点は定まっていなかった。

「輸入権を取り上げられたらヌエジさんは困るのではないですか？」

「もしそうになったらヌエジの構想がすべて崩れます。彼はブリヂストンタイヤの商売を拡大して、将来は彼の五人の息子たち各々に支店を持たせるつもりですが、それが出来なくなるかもしれない」

「カダフィーの計画が実現しないといひですね」と私が言うのと、アブドラ氏はまわりを見回して、

「為替や国際ビジネスの知識も経験もないこの国の公務員に出来るわけがない」と小声で吐きすてるように言った。

しかしそういう政治的な問題にかかわりなく、私にはやるべきことがある。

「アブドラさん、砂漠用トラックタイヤの品質確認のために、前からお願いしている大手運送会社を訪聞したいのです。ヌエジさんに案内して頂きたいのですが」

「わかりました。今日のヌエジの機嫌は良くないようですが、とにかく聞いてみます」

しかし答えは、「だめだ」の一言だった。

「自分で行くので運送会社の名前と住所を教えてください」と言っても、

「勝手に行ってはだめだ」と、とりつく島もない。アブドラ氏が私を慰めるように言った。

「今日のところはあきらめた方がよさそうですね」

彼の年齢は四十五歳、頑固者だが情にもろいところもある。ヌエジ社といっても会社組織ではなく、普通のタイヤショップで、表に店、奥に倉庫があり、多サイズのタイヤが積んである。全て日本製のブリヂストンブランドだ。店の前はベンガジのメインストリートだが、車も人通りもそう多くはない。特に女性の姿はめったになく、時折歩いてきたとしてもヒシヤブ、アバーヤで上から下まで覆っているから顔も体の線もわからない。ヌエジ氏の横には携帯ラジオがあり、そこからカダフィー大佐の演説が流れているらしく、耳はそこに集中しているようだ。

演説が終わるとヌエジ氏が言った。

「カダフィー ムシユクワイエス」カダフィーはだめだ、という意味だが、秘密警察がうるうるしているから、聞かれたら大変なことになる。

隣で車のパーツショップを営むアブドラ氏がやってきた。ヌエジ氏にはアラビア語しか通じないので、私が来た時は彼が英語で通訳をしてくれる。

私は早速聞いた。

「アブドラさん、たった今カダフィーの演説があったようですが何を話したんですか？」

「ああ、私も聞いていました。物資の輸入権を民間から取り上げて、国でやるということです」

我々がやり取りしている間に、今日は学校が早く終わったのか、ヌエジ氏の五人の息子たちが集まって来た。女の子も四人いるそうだが姿を見せたことはない。

私は早速五歳のムスターファを肩車したり、しばらく子どもたちと遊んで時間をつぶしていたが、ヌエジ氏は動かない。この日の調査はあきらめ、タクシーでリビアプラザホテルへ行き、チェックインした。

ホテル事情がタイトの中、この上級ホテルに泊まれるのはラッキーだ。前回のホテルは不潔でまいった。リビア人は用を足したあと紙を使わず水を使い、左手で尻を拭く。だからトイレがびちゃびちゃだ。そんなトイレで用を足す気にならず、がまんしたので脂汗が出て具合が悪くなった。ここはベンガジ唯一の外人が泊まれるホテルなので部屋も設備も問題はない。

ただホテル内は客はほとんど男なのが異様な光景だ。もちろん従業員もルームメイドも含めて男だけの社会。女はどこにいます。

翌日もヌエジ氏は客先へ連れて行ってはくれなかった。なかなか思うように行かないのが海外、特に発展途上国での業務の特性だ。

私にも意地がある。向こうがアラブの頑固者なら、こっちは九州の肥後もっこすたい。もう頭を下げてお願いしたい。

りはしない。

訪問三日目、店へ行くと店の前にトラックが停まっており、ヌエジ氏と長男フアラージ、二男ハミッドが忙しく働いていた。はるばる日本からタイヤが着荷したらしい。

タイヤをトラックから降ろし、店の奥の倉庫に運び込んで、天井の高さまである棚に積み込まなければならない。重労働だが、ヌエジ氏にとってはこのタイヤが、まさに金となる木である。

私はチャンスだと思った。この作業を手伝って汗をかくことで、ヌエジ氏の心証が良くなることを期待する下心だ。私の仲間のタイヤだからかわいしいし、それを整理整頓することには何のためらいもないが、本来私がやるべき仕事ではない。それはわかっているが、その日はこの作業に没頭した。

翌朝、いつものようにタクシーで店に行くと、ヌエジ氏と通訳のアブドラ氏が待ち構えていた。

「運送会社を何軒か車で回るようですよ」とアブドラ氏ははむむように言った。私は「やった!」と叫んだ。

二人に同行して、この日一日かけてブリヂストンとその競合品であるミシュランの両方を使っている大手運送会社四社を訪問した。

今まで試行錯誤を繰り返して、我が社の技術の粋を集めた

くれた。

「一九一一年にイタリアがオスマン帝国から奪い取り、第二次大戦で破れるまで三十四年間、リビアはイタリアの植民地でした。一九四九年にリビア連合王国として独立し、その後一九六九年にガダフィー大佐のクーデターによりリビアアラブ共和国となっています。独裁政権であり、いろいろ問題があります」

どう問題があるのかは、程なくヌエジ氏も、そして私自身も身をもつて知ることとなる。カダフィーがついに独裁者としての伝家の宝刀を抜いたのだ。

「次年度（一九七七年）より、物資の調達を輸入公団による国際入札で行う」というもの。物資にはタイヤも含まれる。ヌエジ氏はタイヤの輸入権を失い、小売りだけの権利が残った。彼の将来構想は無残にも砕けた。小売り権さえいずればどうなるかわからない。

一方ブリヂストンにとってはリビアへの扉が閉ざされた訳ではない。入札に勝つことでビジネスの規模拡大の可能性が生まれ、どちらかと言えばむしろ歓迎であった。

ブリヂストンは砂漠用特別スペックの日本での量産体制を整え、この商品を柱として広いサイズレンジを駆使して入札に臨んだ。

結果は一千万米ドル（二十八億円）という大きな契約獲得となった。ヌエジ氏とのビジネス規模の約五倍である。

その夜はヌエジ氏の自宅に食事招かれた。「これは異例のことです。余程あなたのことが気に入ったのでしょう」とアブドラ氏が私に言った。

食事の席で驚いたことがいくつかあった。子供は長男だけがメインテーブルに同席できる。二男以下は別席に控え、お客の食事が終わるのを待って、残った分を取っていく。なかなか厳しいしつぽだ。

夫人や女の子は全く姿を見せないが、どこからかこちらを見ているらしい。やはりアラブは男子中心の世界だ。

食事中にアブドラ氏がリビアの歴史について説明をして

ヌエジ氏の心中を察すれば胸が痛むが、これがビジネスの世界だ。

我々に対する今までのヌエジ氏の貢献は十分感謝しつつも、あえて我々はヌエジ氏との接触を完全に絶った。

民間業者と海外メーカーが接触を続けていたら、秘密警察にどう誤解されるかわからない。ヌエジ氏にも我々にもリスクがある。リビアというのは油断できない国だ。

そして私はビッグビジネス獲得の喜び半分のまま帰国となった。

四十二年間続いたカダフィー政権崩壊の報に接したのは二〇一一年のことで、私がブリヂストンを退社した後である。民主化されたリビアではあるがその後も混乱が続いていると聞く。

世界には専制、独裁、あるいは民主主義と様々な政治体制があるが、いずれにせよ、政治家たちの見識の低さに翻弄されるのはいつも民衆である。

カダフィーという独裁者にもてあそばれ、民主化されてもお不安定な政治に身を委ねなければならぬリビア国民、そしてヌエジ一族のその後の運命や如何に。

気がかりだが確かめる術はない。当時五歳のムスターファが私の肩の上で飛び跳ねたお尻の感触は今でも残っている。



たけなか すいぜん

竹中水前

熊本県出身
1965 (株)ブリヂストン入社
70 日本大学理工学部夜間部卒
75年よりブリヂストンからの海外赴任で8ヶ国、計23年間家族帯同で駐在、出張した国は70ヶ国強
2010 ブリヂストン退社
2010～16 三井物産パッケージング(株)技術顧問

受賞の言葉

竹中水前

今から約半世紀前の事です。カダフィー政権の黎明期の頃、私はよく現地を訪れましたが、その時の出来事を描きました。ブリヂストンはサハラ砂漠用タイヤを武器にリビア市場へ参入を図り、現地のヌエジ氏を代理店として起用しました。彼はブリヂストン製品を活用して、企業を拡大していくという大きな夢を描いていました。カダフィー政権はその夢を無残にも打ち砕いたのです。このエッセイに優秀賞を戴き嬉しく思います。ヌエジ一族のことを考えると手放しでは喜べない心境でもあります。

第18回
文芸思潮
エッセイ賞

優秀賞

Essay

女ともだち——同志

宮尾美明

ミミズが這ったようなハガキが来た。字が小さすぎて読めない。ばかりか時々かすれて消えている。宛名のわたしの字もよろよろとよろめいている。やれやれ、一体誰だ？

差し出し人の名前を見たとき、思わずあとうめいていた。老眼鏡で読み進めていくと、「わたしの字のように世界もどんどん小さくなっていきます。どんどんできることも少なくなっていくます。この病の進行通りに進んでいきます」お元気ですかの後に彼女の叫び声が大きくなり小さくなりわたしの胸に浸透していく。わたしも脳梗塞を患った。彼女はパーキンソン病である。少し前までは、「薬を飲んで二時間ほどは話ができるよ」と電話がかかってくる。少し話すと声が小さくなり「疲れてきたの。声がかすれて出ないの。ごめんね」そう言って電話を切る。今は、「歩くことが困難になつてきて、着替えて二時間もかかるようになった」と言う。老いると言うことは果てしない苦行であ

る。ハガキの最後に「昔、どんな苦難をも乗り越えてきた私たち」とある。「最後まで頑張りましょう」と、結んでいる。いっぱいいっぱいいろいろなことがあった。でも若い頃経験してきた苦難など苦難に入るのだろうかと思はれ、それでも抱えきれないほど沢山の彼女との若かった頃のこととが浮かんできて胸が一杯になる。

出会いは生意気な女子大生だった頃。当時は女子大生など少なくて一種のブランドで、それだから生意気であったと思う。彼女もわたしも下宿していた。県外の各地からやってきた下宿生は総じて貧困にあえいでいた。公立の大学で高校より学費は安く、いくつかの奨学金とバイトをたくさん掛け持ちすれば自力で大学に何とか通い、生活費もかかるうじて持ちこたえることができた。つまりお嬢様の大学ではなく貧困で学業に飢えていた女子大生だったと思う。勿

論地元から通う学生は裕福の家庭の生徒もいたが、どの生徒も華やかに持てはやされる女子大生のイメージからは遠かった。一言で言えば真面目で地味で、勉強がしたかった女子大生。

三百人も入れそうな講義室に入ると満席だった。英語の授業だったと思う。わたしは例によって入り口に一番近い席。それも後方の。つまり一刻も早く出たいというあんまり褒められた生徒ではなかった。彼女は一番前の中央。つまり教授から一番近い席を陣取っていた。いつものことか、たまたまその時だけだったかは定かではない。授業が始まった。全部英語の確かに難しい講義が始まった。先生の真下で彼女は講義が始まるとすぐに居眠りを始めた。こっくりこっくりカタン、そのリズム正しい動きは後ろの生徒なら誰でも気が付いた。わたしにはない度胸だった。ハラハラとみていた。

「ええ加減にせい」

突然日本語の叱責の声が講義室に響いた。誰も彼もがはっとした。いや誰も彼もが波打つように講義の退屈さに夢現の状態になり、各自が自分のことだと目が覚めたといった方が正しいかもしれない。先生が真下の彼女を指さし激しく怒りの声を上げていた。わたしは先生の怒りは当然で、眠るなら目立たない後ろの方に座っていればよかつ

たのに、とむしろ先生を気の毒に思っていた。誰がどう見ても彼女の方がよくないということは分かっていた。勿論私も。ところが、中止されてやにわに立ち上がった彼女は、怒鳴る先生よりさらに大きな声で講義室内に響くような声を上げた。言っておくがまだ大学に入りたての一年生である。しかも講義は一年から四年まで受けることができたし、大きな講義室でほぼ満席に近かった。

「先生の授業は面白くないし、何を言っているのかはつきりしないし、とても聞いていられない。私たちに聞く耳を持つような授業をやって欲しい。そうすれば眠ることもないしちゃんと聞いていたと思います」

当時、もう今から六十年も前のことであるので、大学の教授と聞いただけで、身がすくむような偉い尊敬の対象のお方である。にもかかわらず彼女が口にしたことは誰もがまさかと二度聞きするくらいの大変な発言だった。そもそも居眠りするなんて事もあり得ない時代のことである。いくら鼻っ柱が強くても言えることではなかった。悪いのは当然彼女の方だったし。わたしは自分も彼女と同じ当事者である気がして身をすくめていた。その時だった。

「彼女の言う通りです。私たちにはさっぱり分からないし、面白くない。もっとわかりやすく興味を引き出すような講義をしてください。わたしも彼女と同じ意見です」

後方の席から誰かが立ち上がった。それは岡山から来た

友だった。当時立ち上がった二人とわたしは三羽がらすと言われるような鼻っ柱ばかり強い友達だった。

わたしはうろたえた。ここで立ち上がらないと、三親友の名が廃るではないか、何でもいい、わたしも教授に抗議をするべきだ。例え彼女の方が悪かろうと、そう心で叫びながらも、わたしは遂に立ち上がることができなかった。二人はわたしに何も言わなかったが、この件に対してわたしは自分のことを卑怯者と位置づけ、長い間彼女らに引け目を感じてきた。

私たちが入学して卒業するまでの四年間は、いわゆる安保の時代。学校あげて県学連の学生達とあらゆる行動を共にした。大学生の八割が自主的に進んで加盟していた。学校の執行部が先頭に立ち、愛知県の各大学と連携し行動を共にしてきた。生徒のほとんどが活動の仲間入りをしていった。ごく一部が運動からは遠ざかっていた。もちろん私たち下宿組は筆頭に立って集会にデモに学習会にオルグに、文字通り一顧の疑問も持たず、睡眠も削り運動に加わっていた。

夜行列車で日比谷に着き一日デモに加わり、また夜行列車で帰る。それが普通になった日常だった。時代と共に生きていく、若者の心は常に何かに燃えていた。

それなのに四年生になり、卒業を控え就職問題が加わる

と、みんな物の見事にりんご白書のように髪を整え、運動に加わっていたことがばれないように就職試験に臨んでいた。信念を貫いて突き進んでいく者もいたが、大半は日和見主義と言われようが就職のために思想などあっさり捨てて別の新たな道に進んで行った。生きることは食べること、食べるためには働くこと、それこそが貧しい学生が生きていくすべだった。

卒業式の後、名古屋駅で三人は、

「お別れや。また会おう」

そう言っただけでわたしは三重、彼女は岐阜、そして彼女に同調して抗議したもう一人の彼女は岡山へと別れていった。バイバイと。バイバイとはすぐにも会える約束だと若い頃は思う。私たち三人もまだ二十二歳。人生なんていつだってやり直しがきくし、いつだって会いたいときに会えるのだから。そう思っていた。

しかし、バイバイと別れて三人が再会できたのが四十年代半ば、三十年近い月日が経っていた。岡山に住む彼女の誘いで瀬戸内海の日生を旅した。三人とも教師。自分のことは棚に上げて偉そうにもっともらしく講義をしていた。面白い授業している？ 彼女に聞きたかったがやめた。瀬戸内海のたくさんある島の中でも一番の大きな島のホテルに宿を取った。冷房もない唯一のホテルに泊まった私たち

は、名物のシヤコを食べた。山盛りの皿に上げられた熱々^{あつあつ}のシヤコを真夏の暑さの中でフウフウと息を吐きながらをむさぼった。暑さとゆであがったばかりの山盛りのシヤコ。あんな熱い食事は最初で最後だった。あんなにシヤコをむさぼって食べたことも初めてだった。したりたり落ちる汗をタオルで拭いながらワハワハハと離れていた三十年に思いをはせ、話は尽きなかった。

「偉そうなこと言っていたけれど、結局は平凡な人生を生きているね」

彼女の言葉に頷く。その通りだった。翌日は赤穂浪士四十七人が奉られた神社を歩く。言葉が少なくなっていた。浪士の中でも本懐を遂げた者、何らかの事情で遂げられなかった者、そのどちらも今は静かに眠っている。手を合わせながら三人三様の思だった。言葉を交わさなくても心は満たされていた。若い頃は話さなければ通じないと口泡吹かせて喋っていた。喋っていても本当は通じていなかったのに、今は話さなくても心は通じていた。それは不思議な感覚だった。

「また来年会おうね」

約束の来年は、その後三十年が過ぎても実現していない。「せめて退職したら」

その約束も難なく反故にされて、退職して十年古希を超え、七十七歳の喜寿もまた飛ぶように過ぎていった。クラ

もう一人の勇ましい岡山の彼女は、七十近くになって、日本語学校の先生になると再度勉強を始めたと聞く。

不死鳥のようにわたしの中で若き頃が蘇る。それはとてもないエネルギーとなつて老いることの意味を教えてくれる。

「頑張らないでいいのよ。老いも病も新しい友達。発見もあるし学びがいもある。私たちが出逢った頃のように仲間になろう」

わたしは大きな字で彼女へ返事を書いた。



宮尾美明

みやお みあき

洋画家

元中学校教員

ふるさと物語コンテスト優秀賞

食の思い出コンテスト最優秀賞

島崎藤村文学賞佳作

北野財団生涯教育論文2席

シャディ85周年贈りものがたり準グランプリ

60歳からの主張入賞

「文芸思潮」イラスト漫画賞表紙絵部門優秀賞

現代洋画精鋭選抜展金賞

ドローイングデッサン版画コンクール金賞

木曾川風景画優秀賞 他受賞多数

ス会は何度もあったが、三人が同時に顔を合わせる事はなかった。

退職し、子供が巣立ち、やれやれのはずだったが、そうは間屋が卸さなかった。自分か連れ合いが病に倒れて介護の日々が始まったのである。もはや旅行するなど夢の夢、会うことすらどんな機会がなくなってしまう、遂に電話になり手紙になり、それらですらどんな先細りとなってしまった。

一番活動家だった彼女は長い間定時制高校に勤めた。住職で教員だったご主人と結婚して岐阜に住んだ。彼女は一人で夏休みになると決まって、長い期間「自分探しの旅」と言い海外旅行を送っていた。子どもたちには様々な苦労があった。が、彼女が病気で倒れて何もできなくなつてから行方不明だった息子が戻ってきて彼女の面倒を見ているという。もう一人の子供もいろいろあったが、寺を継いでいる。これ以上いい人はいないだろうと思われる彼女のご主人は、教職と住職を掛け持ちし、結婚など難しいと思われていた彼女と二人揃って病を持ちながらも助け合つて暮らしている。

いつも中途半端で度胸もなかったわたしは教師をやりながら絵描きになった。夫は早くから病で倒れ、長い介護生活を続けながら絵を描き続けている。



作家高橋三千綱の遺作 500円
注文はアジア文化社まで

受賞の言葉

宮尾美明

過去を振り返ったとき、私の心の中に一番大きな場所を占めているのは家族を除けば女ともだちです。最近女ともだちについて書き始めました。私の絵の道への第一歩も「女ともだち」でした。女友達がいたから今まで来られたと思います。たくさんさんの夢や刺激や愛を与えてくれた一人一人が私の人生の宝物です。彼女たちに再度出会うためのチャンスを下さいましてありがとうございます。

たたむ

中村郁恵

母の葬儀に、姉が現れることはなかった。その死を伝える電話口にも出ることはなく、義兄に日程等の伝達を頼んだ。東京での仕事が多忙とは察していたが、約十年、母と私は姉に会っていない。留守電やメールに返信してくることもなかった歳月を思うと、今回も姉らしい意思表示に相違なかった。

亡くなる三ヶ月前。「毎朝八時に」と約束した電話は、何度かけても話中だった。胸騒ぎは的中し、寝室には子機を握ったままの母がいた。この二年程前から独居の母はめっきり衰えた。私の自宅から実家まで車で片道二十分。様子を見に通う毎日だった。九十歳。覚悟はしていたのに、やはり身体の震えが止まらなかった。同乗した救急車の振動は、姉に知らせるべきかの迷いも小刻みに揺らしてきた。過去に二度、重い肺炎を患った母の右肺は殆ど機能しておらず、緊急搬送先の若い担当医は、静かな声でこう告げてきた。

「脳出血は処置できましたが、おそらく誤嚥性肺炎になる

言い方はしなかった。だが、あえて表出しない心情は子どもにも敏感に伝心する。利発な姉は当然察知していただろう。親の懐へ屈託なく潜り込む妹への妬ましさもあったのかもしれない。

五歳の夏のある日。珍しく姉が友達と「かくれんぼうをしよう」と誘いに来た。友達がいると明朗な姉だった。滅多にない笑顔に私も満面で応えた。自宅の小さな庭の奥に植わるこんもりした低木と低木の間に、できる限り身体を締め息も潜めた。気づくと、近くにあったはずの姉達の声や足音は消えていた。屈む痛みが痺れに変わった頃、枝葉をすり抜けてきた湿った風が、編んだ毛先や首筋を舐めてきた。思わず立ち上がると誰の姿もなかった。家に戻ると姉たちはお菓子を食べていた。姉は、私をチラッと見て鼻先で薄く笑った。その表情は、一つの確信となって私の真中を突いてきた。〈そうか。お姉ちゃんは私のすべてを嫌いなんだ〉今までの冷めた視線と直結した瞬間でもあった。にわかに、身体中の皮裏が強く収縮していく感覚が走った。初めて知るこの錯覚や少し遅れて届いた感情の揺動を、母に説明する術を五歳の私は持ち得ず、黙するしかなかった。だが、姉のことは不思議と怖くも嫌いにもならなかった。

私の小学校入学時だった。母は姉に、環境に慣れるまでしばらく一緒に登校を頼んだ。

と思われます」

それは、死期が近いことを意味していた。逡巡の末にやはり伝えようと決意した。電話を受けたのはこの時も義兄だった。強く促されたのだろう、億劫そうな声が懐かしさを絡ませて受話器を通ってきた。だが、開口一番に、

「用事はそれだけ？」

「それだけって。お母さん、もう長くないよ」

返事代わりに渡ってきた数秒のノイズを遮り、

「じゃあ、何か変化があったら知らせるね」

「連絡とか、いらなから！」

厳しい響きが私の耳奥で長く尾を引いていた。

三歳上の姉とは、幼い頃から遊んだことがない。「おはよう」「おやすみ」といった最低限の挨拶は交わしたが、心底笑い、語り合った記憶もない。私達はどこを切り取っても対照的だった。人形やままごとには興味を示さない大人びた眼から注がれる冷ややかな視線を、私は幼いながらに感知していた。両親は「お姉ちゃんだから」という

「それはしたくない。自分で行ってよ」

強く放たれた声は、さらに尖った。

「学校で会っても話しかけないで。絶対に」

両親は姉と膝を突き合わせていたが、そんな言動にも慣れた私は、顔色を窺いつつ歩くより、一人の方が気楽だと思ったことを覚えている。姉は、両親に対しても概ね機嫌だった。対処法を見出せずに惑う親の姿を近く遠く眺めてきた私は、自分の反抗時期を逸してしまった。それでも、父の在宅時には四人で、不在の時は三人で、淡い橙色の灯りの下、狭い食卓を囲み食事だけは一緒に摂っていた。

高校生の姉は、少女マンガと安部公房、ヘッセとカミュを枕元に散乱させ、タロット占いの合間に勉強していた。希望の大学に合格した夜、珍しく私の部屋をノックしてきた。

「もうここに住むことはない。お父さんとお母さんのことは、あんたに任せるから」

屹然と放ち、札幌から飛び出していった。そう言いながらも、学生の頃は仏頂面で帰省していたが、就職、結婚と次第に足は遠のき、一方的な隔たりが拡がりを増していった。

交点を見出せない姉妹だったのに、母の死により〈相続人〉という接点を得た。相続といっても負債がない程度である。父の死後二十五年、誰にも頼らず質素に暮らしてき

た母の残高は僅かだ。だが、古い家が残ってしまった。母の体力が弱まるに比例し、実家処分への懸念が私の内で膨らんでいった。不通の姉と相談に至るなど迂遠の道のりだった。幸い母の認知度に問題はなかった。自署できるうちに更地にし、母の要望に沿う介護施設の費用にと思っていた。その旨を提案したこともあったが、母はいつも頑なだった。

「何もいらない。お父さんが設計してあなたが育ったこの家に最期まで住めればいいの」

懇願に近かった。介護認定は要支援一。確かに、私の僅かな手助けがあれば自立できていた。自宅で過ごす時間が母に安寧の律動をもたらすことはあきらかだった。コロナ禍で施設見学は不可。後々臍を噛む思いはしたくない自分もいた。限界の数歩手前まで寄り添う道を私は選んだ。

築五十余年の家屋に価値はなくても、誰かが相続する形式を取らなければならない。私は、依頼した司法書士に相談し、義兄に仲立ちを乞うことにした。姉の手前、葬儀に参列しなかった詫び代わりに快諾してくれた義兄には、こう伝えた。「処分時に出る粗大ごみの廃棄料、解体費用、不動産会社への売買仲介手数料等を差し引いた後いづれ等分に」と。それが、両親との約束でもあった。結果、姉は弁護士を代理人に立てた。義兄には感謝しなかった。私や両親は、姉が抱え続けた鬱屈の根源を探り得なかった。

で私はレコードの持ち方、手入れ法、針の乗せ方を覚えた。

幼い指は細い上に動きが鈍い。それでも父は手を出さず「もう一回」「また初めから」と、反復させた。姉と違い逃げ出さなかったのは、レコードの溝に惹かれたからだだった。黒光りする円の中を、やはり円形の細い線が幾重にも等間隔に並んでは溝となって回る。僅かな窪みに何かが潜んでいるようだった。針の尖端が規則正しく円を描く様が、私の眼を呼び続けた。そんな私に、父は音溝の構造を説いたが四歳には理解できなかった。私に聴かせたがったドビュッシーの『月の光』があまりに調べ、父の隣りで私は反射しては消える半透明の弧や溝の行方を追いかけていた。

納戸代わりの部屋では、洋裁を趣味とする母が家族や自分の一着をと、暇があれば布地と向きあっていた。陽が斜めにしか入らない窓辺に、工業用の足踏みミシンがどっしりと構えていた。背を少し丸めた母は、右手ではずみ車を回し始める。初めはそっと。しだいに勢いをつけて。布と対峙する眼は指先と呼応した感覚を針に待み、はずみ車を回転させていく。細いゴムベルトは上へ下へと忙しく循環。足踏み板はシーソーに似た傾斜を繰り返した。針は、左手から送られてくる布を違わずに等間隔で刺すことを怠らない。上糸と下糸の絡みあい、電車の走行音に似たりズムを弾ませ、象られた布と布を新たな形に結んでいった。鮮やかに立ち現れた母の背や手が、私の右手をはずみ

素直な自分を広げられる場所が、今の姉には在る。凝固したままの矩^{しかた}ながら、安堵という滴りが、私の胸底で乾ききっていたしこりを静かに潤わせた。

家の処分に拘^{こだ}ったのは、相続だけが理由ではなかった。空き家となれば、荒廃以外に庭や除雪、防犯面の問題に直面する。人気のない家は、住人の生気という蓋が外れ、隠棲していた陰湿な影が這い出し外壁にまで繁殖する気がしていた。何より、質朴な営みで充積した家が朽ちていく様を視たくはなかった。解体から売買仲介までを懇意の建設会社に委託した私は、遺品整理のために再び実家に通いだした。

三和^た土から上がる一歩目の足裏は、行く度に役目を終えた家の寂寥を吸い込んだ。こみ上げてくる重いうねりを払うべく、急いでベランダや窓を開け放った。深く息を吐き、感情を外す意識を敷くことから毎回の取捨作業は始まった。とにかく物が多い。食器や調理器具。衣類に布団。アルバム——可燃と不燃の袋に迷わず分別。母が好んでいた鍋と蓋が袋の中で擦れて鈍く鳴いても、視線は向けない。階段五段目の必ず軋む音にも、立ち止まらない。感傷を寄せつけず淡々と進めるために、私はラヴェルの『ボレロ』ばかりを大きく流した。

けれど、ふと手が止まることもあった。父の小さな書斎には、昭和に流行った大型のステレオがあった。この部屋

車にかけさせた。覚えのある金属の冷たさが手のひらで溶けだし、私の内壁に懷慕のリズムを鏤めては、ゆるやかに落ちていった。感情を外す意識を越えて起き上がってくる歳月の欠片を、私は丁寧^{ていねい}に点綴^{てんてい}しては、いつの日か自分を振り返る日に宛てた手紙として心の中でまっすぐに折り、胸奥深くにしまい込んだ。

五十余年は、真新しい段ボール大小二箱に凝縮された。小箱には、父が姉の成長を詠んだ句帳。母がコメントを入れた姉のアルバムを。姉に会う日は巡^{めぐ}ってこないだろうが、捨てることは忍ばれた。私の大箱には、母の手が握り続けた洋裁道具。建築士だった父の製図用定規など、離しがたい匂いを詰め込んだ。

箱の蓋部分を左右上下に折っていると、ふいにその四枚が、姉と私、母と父に思えてきた。閉じた矩形の面は、狭い食卓を呼び覚ました。向かいあい、他愛のない会話が飛び交う中、姉は黙々と箸を動かしていた。木目の天板を囲む四人が、歪^{ゆが}ながらも家族だった時間が透けては、またたき滅した。私はもう一度蓋を開け、ベランダから最後の陽光と風をたつぷり注ぎ、一枚、一枚、たたみ直した。空気の流れがよくなりすぎた天井や壁で『ボレロ』が、より強く跳ね返っていた。

受賞の言葉

中村郁恵

原稿用紙に向かう前、私は内側から表出したい一点の追究に時間を費やします。主体の核心まで到達するのは困難ですが、深淵まで意識を下ろし掬った言葉が人間の本質に触れ、佳い作品に繋がると信じています。その上に描写力や構成力が身に付けば、と理解しながら、一筋縄ではいきません。が、ここに書く醍醐味が内包されていることも事実です。この度は、評価をしていただき感謝申し上げます。さらなる弾みに致します。



中村郁恵

なかむら ふみえ
札幌市在住

「グッフォーの会」(札幌)で詩作、「800字の会」(函館)で散文を精進途上

・『文芸思潮』現代詩賞

第11、13、14、15、17回奨励賞

第12、16、18回優秀賞

・『文芸思潮』エッセイ賞

第14、17回優秀賞

・2023年8月初詩集『Mの裏庭』(港の人)刊行

眼、あるいは光について

川寄雄司

美術の大学へ絵の一つも描かずに推薦で入り、煙草を吸ったり、寝たり、ギターを弾いたりして過ごし、小説を書いて卒業した。そのまま小説や詩を書く者として、実家で過ごした。

文字にも模写があるならば、と思つて、原稿用紙に鉛筆で、好きな短編を書き写すことにした。どれくらい疲れるのか。何日くらいかかるのか。作業量を知りたかった。ヘッセの『メルヒェン』を選んで、その中から「ファルドウム」を写し始めた。

ある町の年の市で、魔法の鏡が出る。何でも一つ願いを叶えてくれるという。人々はことごとく、その願いを叶えてもらった。町はずれの建物に青年が二人。まだ叶えてもらっていないのはもう彼らだけになった。一人は楽器を弾き、一人はそれを聴いていた。そこへ飛び込んできた男にせつつかれて、一人はそのまま音楽になった。悲しんでもう一人は山になった。第二部「山」。それからは山の単位

で話が進み、麓で人が栄えたり滅んだりする。ごうごうと時が過ぎて、ただ唯一の持続のように山がある。その頂きに湖があり、夜の星が反射する。そういう話だった。

私は一週間ほどそれを写し終えた。書くスピードで読むので、中身がゆっくり染み込んでとても気持ちよくなっていた。定めた目標に達した安堵を抱くように一服した。シャワーだけ浴びて寝ることにしよう。二階の部屋へ戻るとき、階段を上がってすぐの部屋で妹が寝転がって携帯をいじっているのが見えた。姉の部屋だった。そのまま廊下を行こうとすると、視界がくすんでいた。雲？ 浴室の蒸気のような……。煙は灯りの加減で三層に見えた。

小走りに自室へ入ると、さつきまで座っていた椅子が燃えている。膝に届くか、どうか、という高さの炎があった。きれいだった。見惚れてはいけけない、とすぐさま階下へ降りて、大きなペットボトルでもないか、水を運ぶものを求めて見渡した。ない。モノを被せても消えるはず、と

飛び戻った。大きさがちょうどいいからか、私は羽毛の座

布団を被せてはたいした。とてもよく燃えた。不審がつて妹が来た。火を見て驚いている。その上私はパンツ一丁である母を呼びながら妹は駆け降りました。その間に、私は向かいの部屋を抜けてタイル張りのベランダへ燃えている椅子を放り込むことにした。ここが本来、妹の部屋である。放り込むときにカーテンレースが引かかって、少し千切れた。

残っていた風呂の湯を洗面器や手桶に汲んで、妹と母が来て、私もそれに混じって行き来した。机の横では、次に読む本として楽しみに並べていた小さい本棚がくすぶっていた。私はそこへぬるま湯をさぶさぶとかけた。地蔵や墓石を洗うような心地がした。

ベランダと玄関から消防隊が入ってきた。玄関で事情を尋ねられた。椅子の下で足を掛ける鉄の輪が融けていたのだ。相当強い火でないとそうはならない。出火の原因、ないしその背景、つまるところここでの疑念は放火、及びその動機である。私は煙草の不始末である旨話した。たまたま吸い殻を、ゴミ袋にしていた小さなビニールに捨てて、椅子に掛けていたのだ。隣で話を聞いていた恐ろしい顔の母が、あんた……、煙草、吸ってたの……？ あんなに嫌いだったじゃないの……。消防隊員が母を見た。すぐに私に向き直った。私は自らの冷静さを心中で褒めてさえいたが、眼はぎらぎらとして仁王立ちのままで、小鬼のよ

うに見えていたかもしれない。四肢の末端が火傷で痛んだ。

それからサンダルを履いて出て、初夏の宵風に運ばれてストレッチャーへ乗り、救急車で搬送された。パンツ一枚にサンダルの私は、NASAで使ってでもないような、銀色のシートにくるまれていた。保温だろうか。雑菌からの防御だろうか。病院につくと、開かれたホイル焼のジャガイモのようにストレッチャーで焦げているところを、職員がかわるがわるに見に来た。右から左からと寄ってきては覗き込んで、肯いたり、真顔のまましばし見つめたりして、声をかけるでもなくそのまま離れて行ってしまう。首から下が土に埋められたか、妖怪になってしまった気分だった。

それから一週間ほど、丸めた背中だけを床につけた姿勢で、燃え残った私物の整理の指示を出した。妹が摘み上げたもののなかにはアダルトビデオもあった。フェチものだった。捨ててくれ、と言った。いくつかの本は、焦げてはいても中身は無事だった。そのうちの一つに、吉本隆明の「言語にとつて美とはなにか」があった。焦げた表紙のなかのその文字だけがいつまでも頭に残った。その問いに体が、火だ、と答えているのを感じた。

踵^{かかと}だけで立ち、手根部で体を支えた。父親が単身赴任先から飛んできて、ガマ穂の油をくれた。火傷に効くようだった。私は因幡の白兔なのだった。父は翌日に戻った。夜になると、母と話した。父が何故、飛んで帰ってきたか分

るか、と聞かれた。分からないので、家が燃えたからだろうと答えた。母は本当にそう思うのか、本当に分からないのかと繰り返し返した。私は分からなかったで、分からない、と戸惑いながら答えた。母はもういい、と言った。あなたはそういう人なのよ。

いくらかまともに歩けるようになって、逃げるように友人宅へ向かった。四肢に包帯を巻き、蒼白した顔でいる私を見て、友人は驚いて、笑った。私も笑った。友人は、廊下に立つ私の絵を描いた。私は実家を出なければならぬ。そう思った。アトリエが必要だ。私は、文字を書くのだ。まだ卒業していなかった友人を誘って、途中で加わったもう一人と、三人で住むことにした。

友人は二人とも最終学年だったので卒業を待った。ひとり浪人で、ひとは留年していたのだ。私と同時に卒業していたもう一人別の友人は、入った会社で疲弊して、退職していた。夜になるとその四人でよく会った。ファミレスで下を向いて話した。夜が更けると沼へ行った。印旛沼は灯りも少なく、体によくない。遠くの鉄塔で赤橙が明滅している。月明かりで飛行機雲が見えた。街の光にかき消されていた星が、おびただしく光っていた。沼の周囲を巡る道を歩いた。背丈を越える草叢に囲まれた道を、夏の蒸す夜も、冬の凍える夜も歩いた。より暗い、奥へと歩くと、暗いと思っていたのは街灯の鋭さのせい、

友人の家へ泊まると言って、夜な夜な少しずつ荷物を運び入れた。あらかた運び終えた日、もう帰らない、と母に言った。返信の内容を友人に相談しながら打った。そこで画家と、武術家と、詩人として暮らした。毎日毎日、如何に生くべきかを話した。絵とは何かを話した。体とは何かを話した。詩とは何かを話した。人間とは何かを話した。死とは何かを話した。幽霊とは何かを話した。食とは、水とは、睡眠とは、家とは、光とは、空気とは、形とは、記憶とは、知覚とは、時間とは、空間とは、次元とは、わたしたちを取り巻いているすべての物事が、何であるのか、何であるかということが出来るのか、そのなかで何であろうとしていくことが出来るのか。私たちという存在は、いったい何なのかについて、話し続けた。そうして四年が過ぎた。それぞれが行く道筋をつけて解散した。二人はその後結婚し、私はまた一人になって、帰る場所を探した。

なんでも一つ、願いを叶えてくれるとしたら、私はやはり山になって、その頂きの湖面に星影を映したと、今でも思っている。もしかするとそれですでに、私の全体にある時の沼として存在しているのかも知れない。そう夢想する端から、姿の見えない問いが響く。いったい誰に、その星の反射が届くというのか。誰の眼にも触れない反映がないになるというのか。しかし、そこに眼がなくても、もう

実際には星月の明るさでほどよかった。鳥や蛙が鳴いた。水面はいつも静かだった。私たちの沈殿した澱のような情動は、沼に吸われるように静まり返り、その上澄みの純粹なものを見つめさせた。水ぎわに降りては、生きていなくてもよい理由を、死ぬ必要のない理由と混ぜ合わせて遊んだ。セックスで揺れている車を覗いた。彫刻のように座っている見知らぬ男を見つけて目を疑った。私たちはこの時期、沼に育てられていた。

卒業年次の慌ただしい二人にかわって、私は家を探した。一人でひたすらに歩いた。不動産屋をいくつも廻った。寝起きする人数分の部屋と、アトリエのために部屋数が多く必要だった。バイトもなく、めばしい物件が見つからなくとも、家に帰ることもできず、ひたすらに歩いて過ごした。何も考えられなかった。どこにいたらよいか分からなかった。移動し続けることだけが、なにかを維持していた。

学業の目処が先に付いた友人が加わって、二人でまた探した。男三人で住まいを借りることは千葉の田舎では不審がられた。あまりにも事故物件を紹介されるので、他殺でなければよいかと思うようになっていた。自殺であれば、皆目氣持ちはわからなくてもないじゃないか。たまに話しかけてやりながら、暮らすもいいさ。もう一人のまだ正気な友人がそれを止めた。そして古い一軒家を見つけた。二人には保証人がいたが、私にはいなかった。

よいのだ。知覚した光に触れて、跳ね返しであつても心で光るということが切実に必要で、あるべき眼は、もう山のなかに「私」としてある。



川寄雄司

かわさき ゆうじ
大阪生まれ。武蔵野美術大学芸術文化学科卒業後、武蔵野大学言語聴覚士養成課程を卒業し、現在は言語聴覚士として勤務。言語の問題に広く関わりながら文字媒体に限らず、平面・立体作品なども含めて作品制作を行っている。

受賞の言葉

川寄雄司

文中に出てくる友人が描いた当時の私の絵に、春先再会した。魚眼レンズを通したような歪みのある鉛筆画で、佇まいが只事ではない。長らく私が所持していたが、彼のアトリエで開かれた個展のために返していた。展示会場で相対していると、他人として振り返り得る距離にいることが身に染みた。この機会にと思ってエッセイとして書いた。これからも星の眼を持つ人称として生きていきたい。

春風を纏った服

菱川町子

友達に誘われ行った喫茶店の二階に「着物リメイクしませんか」という張り紙があった。あまり興味もなかったが、来たついでとふらっと立ち寄ってみた。狭い店内に一目で和服とわかる柄の洋服が、所せましとぶら下がっている。ひととおり適当に見て一階に下り友達とおしゃべりすると、着物リメイクは私の記憶から消えた。いや、消えたはずだった。着物も洋服を新調することも、あまり興味がなかったからだ。

二、三日して、なぜかあのぶらさがっていた和服柄の服が、頭の中でユラユラ揺れている。おしくら饅頭していた服が何か言いたげだった。我が家にある箆の奥に、ほとんど着たことがない着物があつたことを思い出し、久しぶりに引き出しを開けてみた。ナフタリンの刺激臭の中に、持ち主に忘れられた着物が静かに眠っていた。防虫剤は決していい香りとは言えないのになぜか懐かしい。幼いころ

母が大島の着物を着て、背筋をしゃんとのばして出かける姿を思い出した。

私の故郷は、「娘が三人いれば身上がつぶれる」と言われるほど、嫁入り道具が派手な土地柄だった。だが、私は結婚が決まった時、最低限の家財道具さえあればいいと思っていた。トラック一台あつた姉に比べ、電気製品は炊飯器、洗濯機のみ。冷蔵庫もテレビもなかった。姉妹でかなり差があつたのにもかかわらず、不満に思わなかったのは姉にない物、嫁入り道具としては珍しい「ピアノ」があつたからだ。小型トラックの荷台に、数少ない嫁入り道具に混ざって、ピアノは黒く誇らしげに輝いていた。

私が育つたのは、忘れられたような山裾の小さな集落だ。見渡せばたんぼや畑ばかり。村人は自給自足が当たり前で、慎ましくひっそりと暮らしていた。そんな山里に若い男の先生が赴任してきた。私たちの担任となったその先

生は、「エリーゼのために」をよく弾いてくれた。放課後になると私たちは先生をぐるっと取り囲み、コンサートに押し掛けたファンさながらに先生の弾くピアノの調べにうっとりとし聴き惚れた。そして私はピアノを習いたいと母にねだつたのだ。

当時ピアノはお金持ちのお嬢様がするものだったにもかかわらず、母は私の願いを叶えてくれた。今ならそれが途方もなく常識外れなことか分かる。家にピアノはないし、買うお金もない。あの時私はただ単純に自分の憧れを言っただけだ。現実問題として、町工場で働く鋳物工の父の給料ではできるはずがない。だが母は、どうしたらできるか考えた。それは今の私でも思いつかないような大胆で柔軟な発想だった。

学校のピアノで練習し、町までバスで一時間半かけてレッスンに通うというのだ。私はそれを困難なこととは露ほども思わず、好きなことができる喜びでワクワクした。バス亭まで自転車で四十分かかるのも苦にならなかつたし、初めて一人でバスに乗るのも平気だった。

小学校、中学校、高等学校と進学しても学校のピアノで練習を続けた。そして教育大学音楽科を目指した高校三年の時、母はピアノを買ってくれた。我が家にピアノが来た時、不可能だと思っていた夢が現実になり、私は嬉しいとい

言うより戸惑っていた。母がピアノを買うお金をどう工面したのか聞くのが恐ろしかった。姉や兄はそんな高価な物を買ってもらっていないし、兄弟の中で、大学に進学したのも私だけだった。卒業すると、中学校の音楽教師として働くことになり、まさしくピアノは私の人生を決めた、かけがえのないものになっていった。

結婚が決まった時、三人兄弟の中で金銭的に親に一番負担をかけたのが心苦しくて、嫁入り道具は本来に必要な物だけでいいと思った。だが母にとっては、着物はどうしても持たせたいものだったらしい。母は若い頃、お茶をたしなんでいたこともあつて着物には詳しかった。お茶の先生に頼まれて、お茶会に参加する若い娘の着付けなどもやっていたようだ。兄弟三人が全員結婚し、経済的にゆとりが生まれると母は自分の着物をもつようになった。それは生地選びから始まり、自分がデザインした図柄を自ら手書きして仕立てるという凝りようだった。恐らく着物は母にとって趣味であると同時に生きがいだったに違いない。

今我が家の箆には、嫁入り道具として持って来た着物がナフタリンに閉じ込められている。母には申し訳ないがこれまでの人生は教師という仕事に振り回されて、着物を着ようという心のゆとりなどあるはずもなかった。優雅に芝居を見に行くのにふさわしい小紋の訪問着は、袖を通したことはなかった。色留袖だけは中学三年を受けもった、

卒業式で二度程着た。羽織、道行、ウールは出番がなくむなしく箆笥の奥で眠っていた。日本中の二十歳の娘たちが豪華な振袖に身を包み、美しく着飾る成人式さえもスーッとだった。母はそのことを気にしていたのだろうか。それとも嫁ぎ先の人達に肩身の狭い思いをさせたくないと思ったのだろうか。無理して一通りそろえてくれたのにもかかわらず、着物は晴れ舞台に登場することはあまりなかった。七十八歳になった私もそろそろ終活、断捨離しなければならぬ時期にきている。着物はもうこれから着ることがないと思っても、近くにあるリサイクルショップに持っていく気にはなれなかった。その店で、結婚式のお色直しに着ても恥ずかしいくらい正絹の振袖に、八千円の値札が付いていて驚いたことがある。箆笥の中にある私の着物を持っていけば、二束三文の値で引き取られるだろう。安い値段で買い叩かれるのは、母の心が踏みにじられるようで悲しい。

断捨離の第一候補でありながら売ることができず、かといって普段着のように着ることもできない。優柔不断の私の心が「着物リメイクします」の張り紙で揺れ動いた。自分では気づかないまま、せっかくの着物を箆笥の肥やしにしてしまった後ろめたさが、地下水のように私の心の奥深く溜まっていたのだろうか。あの着物リメイクの文字は、地下水が溜まった暗い洞窟に穴をあけ、間欠泉となって吹き出したに違いない。

クは新調した服にはない「心」がある。紡ぎ出された糸の中に、母が私を慈しんでくれた愛がある。

ほどなくして店から出来上がったので取りにくるよう電話があった。包みを解くと「道行」が見事に変身していた。着物でもない、かといって洋服でもない。私が今までに着たことがない新しい感覚の服だ。襟なしの単純なデザインは着物の柄を生かし、しかも着やすい。ボタン一つで脱ぎ着ができる。真正面から見ると、サクラ、カキツバタ、梅、もみじ、菊、まさしく百花繚乱。四季の花が着い空に咲き乱れているようだ。着物の「道行」では分からなかった柄の全体像がうかびあがってきた。

家に着くなり出来上がったリメイク服を着て、喫茶店と一緒に誘ってくれた友に見せた。彼女は意外な成り行きに、「うわーっ、ステキね」と言いながらも驚いたようだ。

暖かくなって桜の便りが聞かれる頃、リメイク服を来て散歩に出た。いつものような一人の散歩ではない。母と一緒に気分だ。

「母ちゃん、あそこ見て、土筆がたくさん出ているよ。しばらく土筆の卵とじは食べてないなあ」

「私、母ちゃんの歳、越えたよ」

「あのね、今まで聞けなかったけど、思い切って言うね。ピアノを買うお金はどこから出したの？　うちにそんなに

間歇泉の勢いに背を押され、箆笥の奥から取り出した一枚の「道行」をリメイクすることにした。初めてのことで要領を得ないので、店に相談に行って驚いた。なんと仕立て代が一万五千円。それだけあればしゃれたブラウスが買える。ユニクロなら二、三枚は買える。安い物好きの主婦根性がリメイクをぐらつかせる。だが私に洋裁の心得は全くないし、ミシンは不用品買い取り業者に持って行ってもらったばかりだ。私の心を見透かしたように店の人が、「ほどき賃が五千円です。ほどうて持ってきてくだされば一万円にします」

この言葉で五千円安くできることがわかりなぜか得した気分になった。久しぶりの高額衣料費の出費を決断した。ほどく前に「道行」をじっくり見てみると、紺の地に白と橙色のカキツバタが咲いている。洋服の柄にはない松やもみじ、菊などがデザインされた小紋の服は、なかなか斬新でおしゃれだ。意外性もあって独創的ではないか。ふわつと羽織るゆったりしたブラウス型にして、セーターと組み合わせればいろいろな着こなしが楽しめる。最近背中が曲がってきた体型もカバーできる。ウエストやお尻が隠れるのもいい。

服を新調する時、新しい自分に出会えるような気がしてワクワクしたものだ。誰も着ることがないままの服は、手触りも着心地も気分を高揚させる。だが、リメイ

お金あったの？」

母が生きている間に私はこの質問をすることができなかった。ピアノを買うお金を工面するために、母がどんな苦労をしたか知るのが恐ろしかったのだ。母は私から感謝の言葉を受けることなく、あの世に旅立ってしまった。どんなに言葉を尽くしても、足りないほど感謝しなければならなかったのに……。

春風を纏ったリメイク服は、母の心そのままにやさしく私を包んでいた。



菱川町子

ひしかわ まちこ
1944 愛知県に生まれる
愛知教育大学を卒業後34年
間に渡って公立小中学校の教
師を勤める。
第13回日本語大賞文部科学
大臣賞
第35回心に残る医療日本医
師会賞
第6回オリオン随筆賞最優秀賞

受賞の言葉

菱川町子

今回の作品は、母の生き方、私への愛を書いたものだ。審査員の先生方が、母の生き方を評価していただいたことに感謝したい。文章力を磨くことも大事だが、私自身が母に負けない生き方をしなければと強く思った。

海風に吹かれながら

春木美子

定年退職後、三カ月休養して新しい職場に就職した。

二十代から看護師として働いてきたので、しばらくは趣味の絵手紙に力を注ぐと思ったが、仕事中心に生活してきた体は何か心さみしくて、看護師募集の広告が目移ってしまふ。就職するならこれまで経験してこなかった科で学び仕事をしたいと思った。

内科と小児科、外科、訪問看護を経験している。本気で働くことを考え出すと、六十歳を過ぎて新しい事をやることが不安になりだして、新しいことは止めようと思えるようになった。

採用されたのは、人工透析を標榜している病院だった。

求人広告には人工透析とは書いてなかったのに、面接の時に初めて人工透析専門の病院と知った。

「内科の病院だと思い応募しました。人工透析は経験がないのでお断りします」私はきっぱりと言ったつもりだったが、看護部長は迷っているを見て取ったのか、「新しいことにチャレンジしてみてもどうですか。まだまだやれま

すよ」

事務長の方を向いて同意を求めるように言う。事務長は黙って頷いた。

黙ったままでいると、なぜか看護部長が今言った、まだまだやれますよという言葉が心の中にすーっと入り込んでエールを送られたような気がしてきた。週四日勤務。就業時間は八時半から十六時。ゆるやかに働くことができるならチャレンジしてみようという気持ちになり「お願いします」と頭を下げていた。

病院までの通勤時間は二時間近くかった。自宅から最寄りの駅まで自転車で行き、東海道線に乗り熱海で降り、伊豆急行線に乗り換えて下田行き電車で病院近くの駅で降りる。

プチ旅行の体だが、毎日通うわけではないし、乗り換えの待ち時間はかかるが満員電車ではなく、ゆったりと座って海を眺めながらの通勤は心地良かった。

配属になった病棟には、常時五十人近い高齢の患者さん

が入院していた。全員が人工透析を受けている。人工透析

は、うまく動かなくなった腎臓の代わりに老廃物を取り除き、血液を浄化する治療法だ。患者さんは静脈を動脈に縫い合わせてつなぎ、直接動脈血を静脈に流す手術をしている。シャントと言いい腕にあることが多い。

シャントの音を聞き分けるのは大事だ。シャントの音がしなければ閉塞している。音が弱いと間近に閉塞するのではないか気になる。毎日緊張の連続だが苦痛ではなかった。時には教えられたことを忘れることもあり、一進一退だね、美子さん。年のせいかなと自虐しながら、慣れるしかないと思った。

透析歴の長い患者さんは、透析のことをよく知っている。透析が終わって病室に戻ると、「今日も無事でした。ありがとうございますと神様に祈っているよ」と話してくれた。透析が終わった後は倦怠感や頭痛、食欲不振の症状を訴える人が多かった。

またたく間に、一年が過ぎていった。体に変調を感じたのは、二〇一六年の年末だった。食欲がなくなり、胃が重く、背中の痛みが強くなった。胃カメラ検査のあと消化器に痛があるから、専門の病院を紹介しようという医師が説明した。

細胞検査はせずとも癌の診断が付くということは、かなり進行しているのだと自覚した。ただ黙って受け止めたが、

心の隅には間違いであってほしいと願う気持ちはあった。

すぐに癌専門病院に連絡してくれて、十二月二十八日に予約が取れたと予約用紙が渡された。

「年内に診てもらえて良かったよ」医師の険しい表情が少し和らいだ。

専門病院を受診後、何日も精密検査をした。治療方針が決まり手術の前に抗癌剤検査をすることになった。五年生存率を言い渡された。生存率の低さに死のイメージが胸を突き、恐怖感で胸が覆い尽くされた。

「仕事をしているんですが、辞めたほうがよいでしょうか」と、打ちひしがれた心を奮い立たせるようにして聞いた。

「仕事は続けてください。抗癌剤の治療が始まるまで、辞めない方が良いでしょう」

強い言葉で医師は言った。

治療が始まる前に師長と面談をするために病棟に行った。談話室でくつろぐ患者さんを見つめていると、やっと慣れたのにと悔しさが滲んでくる。二度と働ける体にはならないうらやまを感じていたので、退職の意志を伝えるつもりだった。

「美子さん、心配してたよ」と看護助手のMさんに声を掛けられた。「Mさん。会えて良かった」私はMさんの胸に飛びつくように抱きついた。大柄なMさんは小柄な私の体を包み込むようにして背中を撫でてくれた。

「ちょっとおいで」Mさんは私の手を強く引つ張って病棟の隅の厨房に押し入れた。

「あんた、仕事を辞めようと思っているんじゃないだろうね」大きなやかんから、お茶をくんだコップを差し出した。

「喉がからから。ありがとう」私の声は震えている。

Mさんは私の仕事をよく手伝ってくれた。体力がない私が、患者の体位を変える事ができないでいると、「あんたには無理だよ。どきな」と軽々と向きを換えてくれた。ある時、台風で電車が止まって帰れなくなり、病室に泊まったことがあった。次の日、夜明け前。病室のドアをノックする人がいて開けるとMさんが立っていた。

「早番ですか」

私の言葉を制して「今日は休みだよ。あんた、朝ご飯がないだろ。持ってきたよ。今なら世界一美しい朝焼けが見られるんだよ。朝日が昇ってくる。屋上に行つて、おにぎり食べながら見てみな」Mさんはタッパーを渡して帰っていった。

屋上の椅子に座り、海を眺めた。水平線の向こうが赤紫色に染まってきた。紫色がピンク色に変わり太陽が少しずつ姿を見せ始める。オレンジ色に空が覆われた時、綺麗さを通り越して神々しさに満ち溢れていた。

「退職を決めて来ました。師長にそう言います」

Mさんは丸椅子を持ってきて私を座らせた。

気がしてきて、食欲がなくなった。けだるい。熱がある。

朝食が終わると、点滴台に寄りかかるようにして、廊下の端の椅子に座って窓外を眺めた。

八階から見下ろす景色は、早咲きの桜が病院を囲み、春はそこまできているのだと知ることができた。朝早くからたくさんの人が玄関から入っていく。

窓を隔てて雪を頂いた富士山が目の前にある。富士山に向かい、もう一度看護師として働かせてくださいと祈った。ある朝、「また戻つてね」と言った患者さんや、関わってきた患者さんの顔が浮かんできて、不意に涙が込み上げてきた。透析を始めることになった時、患者さんはどんな気持ちになったろうか。自分は患者さんの心にどれだけ寄り添えたのだろうか。もう一度看護の現場に戻るなら、優しくありたい。想いが胸を揺さぶり続けた。

一年間療養をして職場に復帰できた。初出勤の朝、駅から歩いて病院へ向かっていると、「良かったね」と声を掛けてくれる人がいて振り向いた。同僚だった。

「Mさんは今日来ますか」私は弾んだ声で問いかけた。その人は、えっと驚いたような顔をして、「知らなかったのね。休んでいるのよ。病気が見つかったのもう出て来れないと思う」病気が見つかったという言葉で、全てを察することができた。

ようやく膨らんできた蕾がしぼんでいくような、淋しさを

「遠くからきて疲れたでしょう。辞めたらだめだよ。辞めたらね、心のね、気持ちの支えがなくなるんだよ。戻れる場所があると思うと、治さなきゃと前向きになれる。私が癌経験者っていうのは知ってるよね。十年たった。私は全部癌は取れていないんだよ。その私がこまでやれてるんだよ。あんたは諦めてるかもしれないけど、癌は一人一人違うんだよ。余命半年と言われて生きている人はたくさんいる。希望だよ。希望を持つことが大事だよ」

Mさんと呼ぶ声がして、「わかつてもらえたかな」と言い残して厨房を出ていった。

Mさんの想いのこもった言葉が胸で激しく渦巻いていた。師長には、休職にしてほしいと告げた。

帰ろうとしてエレベーターの前に立っていると、三人の車椅子の患者さんが近づいてきた。「病気なんだって？」男性の患者さんに不意に言われて面食らった。「良くなったら、帰ってきてよね。いなくなると淋しいよ」そう言ってきた女性の患者さんは、最初は「人工透析看護は難しいんだよ。もっと勉強しなよ」とカーテンを閉めて腕だけを出してシャントの音を聞かせた人だった。が、半年過ぎた頃から会話するようになっていた。「ありがとう」私は三人と握手してエレベーターに乗った。蒼白な顔色の私がエレベーターの鏡に映っていた。

入院して抗癌剤の点滴治療が始まった。数日すると吐き

とも、哀しさともつかないものを抱え、海風に吹かれながら立ちすくんでいた。



春木美子

はるき よしこ

1950 広島生まれ

20代から看護師として勤務する

2018 パンプキンエッセイ内館牧子賞

2023 家の光読者体験手記 最優秀賞

2022 電子書籍「神様の贈り物」

平和と命をテーマにした書籍出版

受賞の言葉

春木美子

栄えある優秀賞を頂き、選考委員の皆様にご心からお礼を申し上げます。病み苦しむ私の「生きる」を支え、エールを惜しみなく送ってくれた亡き友に捧げる文を評価して頂き感謝無量です。振り返ってみますと、苦しい時、悲しい時、いつも何かを書くことで救われ、力をもらいました。友達とは紙とボールペンの人生です。体力、気力の衰えを感じながらも書くという行為を継続したい。それが夢です。